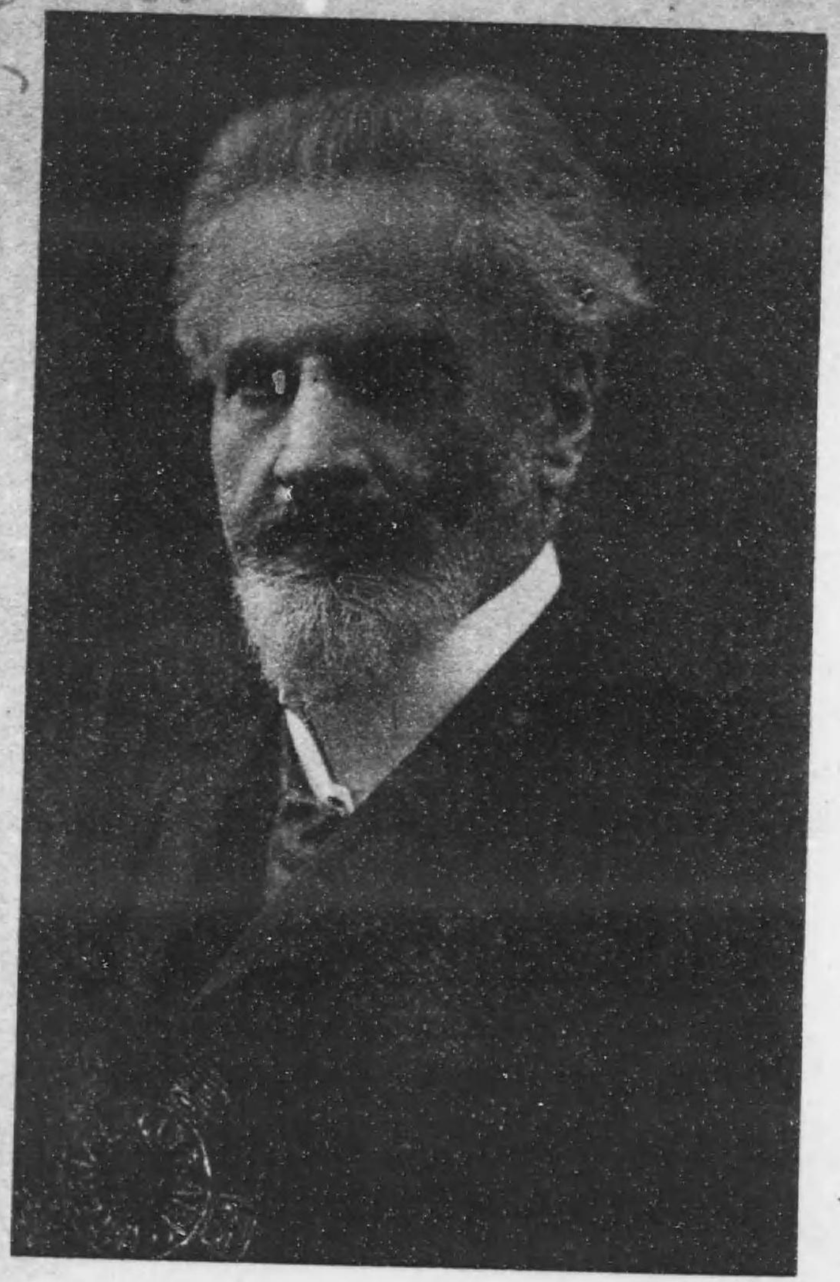
賀

516
148



A. Riehl

父上の靈前に捧ぐ

家嚴諱は健治、備中都窪郡則武氏の出。夙に犬飼松窓の門に遊び、覇冠笈を負ふて東都に遊學す。西南戰爭起るに及び、軍に從ひ、肥薩の山野に轉戰す。後歸鄉して安井姓を襲ふ。資性溫厚にして沈毅、眞に寬厚の長者たると共に、秋毫枉げざる嚴正の人におはしき。漢學の造詣深く、識見衆に秀で給ひしも、名聞を求めず、村巷の先覺を以て任じ、一意家道を修めて、躬ら奉ずること極めて薄く、嘗て逸樂を求めず、人と交はるに赤誠を披瀝し、隣人の爲に計りて忠篤、一生を通じて恭儉克己至誠を以て一貫し給ひき。時に近隣の子弟を集めて學を授け給ふ。嘗て予の子弟薫陶の職に就くや、「人敎ふる人の心は柔かに剛く素直に影淸くあれ」の一句を寄せて予を訓へ給ひき。晩年老農を以て任じ、白髯溫顏、里閭に彝倫を說き、農耕經濟の途を講じ、協働的農村理想境を實現せんとし、之を說くに宗敎的熱誠を以てし給ひき。果然父君は一個の宗敎を有し給ひき。宜なる哉、居常敬虔摯實常に法悅を樂しむの慨あり、晏如として大往生を遂げ給ひしことや。大正七年八月廿二日齡六十七を以てみまかり給ふ。本書の改訂成るに當り謹んで之を靈前に捧ぐ。

大正九年七月四日

父上の靈前に捧ぐ

豚兒拜識

原著者の書翰の譯文

拜啓　三月十四日の貴翰一昨日落手致候。小生は豫て貴國人を尊敬致し候へば書中御依頼の趣は小生の甚だ滿足するところに御座候。從て桑木敎授の御紹介が貴下の飜譯の原著と一致すべきことを保障致候間拙著「現代哲學概論」を日本語に飜譯せんとする御希望は喜んで承諾致候。故に事小生に繫る限り飜譯を出版すべき權利を貴下に讓り申候。又原出版人よりも此事に關し貴下に通知致すべく、必ず承諾致すべくと確信仕候。尙桑木敎授へも御書面に對し小生に代り御禮申上げ下され度且吳れ〳〵も宜敷御傳へ下され度候。敬具

千九百十三年四月三日

ノイバーベルスベルヒ、ベルダストラーセ三丁目

リール

原著者の書翰の譯文

改版はしがき

本書は伯林大學哲學教授リール博士の Zur Einführung in die Philosophie der Gegenwart を飜譯したものです。本書の舊版「現代哲學講話」を公にしたのは大正二年の晩秋、東山の杜が紅葉して、叡山が澄み切つた空にくつきりと美しい姿を現はす頃でした。詩の都のロマンチックな雰圍氣に心ゆくばかり浸りながら、原稿のペンを走らした當時の生活は今になつかしい追憶であります。但だ當時學窓の餘暇匆々の裡に周到な推敲を經ないで公にした爲に、あとから讀みかへして意に充たぬ點が多くあり、一日も早く訂正しようと望んでゐました。今般

裝を新にして再び世に公にする機會を得たのは私にとつて非常な幸福であります。

アロイス・リール博士は一八四四年ボーチェンに生れ、三十歳にしてグラーツ大學の教授となり、後フライブルヒ、キール、ハルレ各大學の教授を經て現に伯林大學の教授であり、既に久しい以前から新カント學派の一人として鬱然たる大家をなしてゐます。現代哲學としての新カント學派は必ずしも歴史的實在としてのカントに卽したものではないが、批評哲學の精神を持し、自然科學的知識と文化價値の確立を使命(アウフガーベ)として、今日極めて普遍な意義と根柢ある生命を有つてゐます。所謂新カント學派の魁をなした者はクーノー・フキッシャー、オットー・リープマン、アルベルト・ランゲ、ファイヒンガー、エルドマン等であり、リープマンが其の著 Kant und Epigonen, 1865 に於て毎章「故にカントに歸らざるべからず」(Also muss auf Kant zurück gegangen werden)と絶叫したことは有名な事實であります。現今狹義の新カント學派たるコーエン、ナトルプのマールブルヒ派、廣義に新カント學派と稱せらるべきヰンデルバンド、リッカート其他バウルゼン、フォルケルト、リール等の間にもカント哲學を解釋するに獨自的主張があり、論旨の徹底に各自差異があつて必ずしも一致するものではありません。就中ヰンデルバンドの如き、自然科學の外に文化哲學を認めて學的知識の範圍を擴充し、所謂「カントを理解することはカントを超越すること

なり」(Kant verstehen heisst über ihn hinausgehen)と云ふ態度に出づる者さへあるが、併し大體に於てカントの精神を受繼いで心理的解釋によつて一切を盡くさんとする心理主義に反對し、先經驗的方法論に憑據して論理主義を或る程度まで徹底せんとする點に於て一致してゐると云つていゝでせう。吾がリール教授はマールブルヒ派と均しく數學的自然科學のみを認めて其他の科學を否定せんとしてゐます、但だコーエン等が實在を觀念として觀念論を主張するに對して、物自體の實在を許し、朴素實在論的に物が感覺の原因たることを說き、認識の經驗的客觀的要素を高調して實在論を主張してゐます。尙敎授は物自體を以てロックの所謂「物そのもの」の飜譯であると解して居ります。

此等の點は敎授の主著「哲學的批評主義」を俟つまでもなく本書にも明言してあります。私は此の說の當否を玆に判定しやうとは思ひません。唯だ範疇論と物自體の說の間の扞格はカント哲學に於て否定すべからざる事實であり、而かも物自體を全然カント哲學から除去することはカントの本意でなく、「純粹理性批判」に於て實在論的主張は可なり濃厚であり、且敎授も云ふ如く朴素實在論の立場を全然捨てることの常に誤であることを指摘するに止めたいと思ひます。

本書を譯出するに當り、出來得る限り嚴密に且つ判り易いやうにと努めたが、飜譯に於て易解と嚴密とを遺憾なく期することは至難のやうに思はれます。流暢な譯文だからと云つて、若し夫れが解說的態度

を執つて、判り易く大意を傳へると云つた風の遣方であるならば、嚴格な意味に於て飜譯とは云へますまい。一世の碩學が深い蘊蓄を傾け、兼ねて哲學上のみならず、自然科學に亘りて可なり高級な豫備的知識を聽講者に豫想して試みた講演を基礎として、雄勁な筆で細緻精到な認識論の問題に及んで、周匝に記述したものを、嚴密に邦文に移して而かも判り易く讀者に提供することは容易なことではありません。況んや原著者も序文に明言してゐるやうに、單に記述すると云つた風よりも讀者を刺衝して、深い感銘を與へんとする目的を以て、修辭の加へられた、文學的に洗錬された本書を邦文に移して、原著の內面的節奏をそのまゝひし〳〵と讀者の胸に傳へ、著者と同一の感激を起さしめんことは極めて難事であり、文辭に馴れぬ私にとつては庶幾し難い事業であります。唯だ然し舊版に於ては嚴密を期する點に於てあまりに原文に捉はれた嫌があり、一讀して明確な理解を得難い個所や、妥當でない點が多々ありました。幸に先輩鹿子木員信君が研鑽に寸暇を惜まるゝ身に拘らず、懇篤なる教示と激勵を與へられた爲に誤謬を少うする機會を得ました。今回多少なりとも面目を改むることが出來たのは全く同君の好意によるのであります。尙語學の素養に乏しい爲に如何なる誤を敢へてしてゐるかも測られません、幸に世上博雅の士の垂教を吝しむなからんことを切望します。

表面的ではあるが兎も角劇的、而かも悲劇的關心（インテレスト）を唆り立てた今回

の歴史的事變を動機として、茲に吾々は、青年らしい、清新にして奔放な、至純にして熾烈な憧憬を以て、新價値を翹望し、その建設に努力してゐます。近世文明の黎明を仰いだルネッサンスから宗教改革、啓蒙思潮期から批判時代と歴史の轉機毎に、因襲や偏見や凡ゆる人間理智の眼を掩ふ面紗から解放せられ、人間至高の要求によつて覺醒せられて、歴史的過程と共に漸次自我の確立に努めて來ました。現に吾々が熱心に希求してゐる新價値は、一層徹底的な理性の優越、自我の確立でなければなりません。功利主義や、功利主義に立脚した一切の「墮落道德」は、自主自律の「君主道德」によつて取替へられねばなりません。本書を譯出するに當つて少くとも私自身は、理性の優越を高調する老哲の勁健な筆によつて、幽遠にして而かも透徹した理想に沈潛し、雄渾な獨逸傳統的思想に浸つて、敬虔と同情と感激に撃たれたが、讀者に同じ心的鼓動を起し、原著者の面目を傳へんとする試みを完全に遂行せんことを期するのは、私にとつて自ら揣らざる譏を招くものでありませう。唯現今思想界の轉機に際し、極めて眞摯に哲學的啓蒙を要求しつゝある時に於て、本書の譯出が讀者に對し、多少なりとも哲學的領會を得る機緣を與へることが出來れば、譯者の微意は酬ゐられたのであります。

本書の成るは、之を前にして、恩師桑木文學博士の懇切至らざるなき提撕と、之を後にして、先輩鹿子木員信君の甚大なる援助に依るの

であります。前には屢々桑木教授を洛北塔之段に訪ねて種々教示を仰ぎ、深夜辭去するを常としました。又恩師西田文學博士からも種々懇篤な指導を賜はりました。又鹿子木君は曩に印度に遊ばるゝ前日、多忙な時間を割いて、態々予を訪ねて半日懇篤な教示を賜はつたのみならず前後を通じて多大の援助と激勵を賜はりました。尙曩には桑木教授から同情ある序文を賜はり、今又鹿子木君から過褒と推讓に充てる序文を賜はり、且リール博士の寫眞を貸與せられ、共に卷頭に掲げて、本書に光彩を添へることを得せしめられました。以上恩師先輩の溫かい庇護と指導を明記して、深く感謝の意を表し、永く紀念したいと思ひます。

本書の公刊に就いて親友四宮兼之、大佛衛、藤田福太郎、木村重樹四君が多大の好意を寄せられたことを明記して深く感謝したいと思ひます。

終に臨んで本書の刊行を可能ならしめた東亞堂の好意を深く感謝せねばなりません。

大正九年七月十五日

光る海を眺めつゝ須磨の寓にて　譯者

本書は夙に公にする筈であつたが、譯者身上の煩累と、次ぎから次ぎと訂正したい個所を改版はしがき

發見するので數回稿を新にしたため意外に遲延しました。私としては前後八年の歲月を要しました。尙原著者の最近の消息を詳にする機會を未だ得ないのを遺憾に思ひます。

序

リール教授の名はヴント、オイケン等の名の如く我學界では著名でない。やゝ專門に哲學を究めて居る人々の間にも、他の獨逸哲學者、例へばコーエン、ギンデルバンド等の如くには廣く知られて居ない。若し其著書にして一般に讀まれて居るものがあるとすれば、フロンマンの叢書中にある「ニィチエ」であらう。此書も勁拔の文章で同情を以て書かれては居るが、寧ろ楮

餘の筆に成つたものといふべきもので、氏の本領は別にある。氏は今現に伯林大學教授中の古參として學界の重鎭たるのみならず、二十餘年前から既に哲學史上に一地位を占めて居る。而して殊にカント研究者に取つては、看過すべからざる一典據となつて居るのである。

氏は多くの哲學史には獨逸實證論者の中に編せられて居る。實に氏の說は實證科學の根據を確定することに努めた點に於て、而して實證科學以外の科學を認めない點に於て、確かに實證論と稱し得るのである。然し氏の實證論を以てコムト一流の佛國實證論と同一視することは大なる誤解であるし、又獨逸の自然科學的哲學とも全然混同してはならぬ。氏は實に多くの現代の學者の如く新カント派と稱し得べきものであるが、然も數學的自然科學の盛な世に出たカント哲學の精神を忠實に傳へようとする點に於て、正統のカント派とも稱し得べきものである。氏は飽くまでもカントの見界を脫却せず、所謂「カントを理會することは之を超越

することなり」といふ態度とはならない。此點が果して現代の哲學者として適當であるか否かを、今此で判定する必要はない。又氏が果して眞に其素志を貫徹して毫もカント以外に出でなかつたか否かも、此で批評する限りではない。余はたゞ氏の此立場を明にして、其現代學界に於ける意味を述べれば足りる。

此思想は一八七六年出版の「哲學的批評主義」三卷に於て早く世人の注意を惹いて居たが、然し長く絶版になつた後、一九〇八年に訂正增補といふよりも寧ろ改版と稱すべき第一卷の第二版が出版せられたので、一層其のカント解釋の立脚地が明瞭になつた所があり、其のカント派と稱せらるる意味が分明になつて來た。

從て氏の思想を解し且つ之によつてカント研究の一材料を得るには、必ず此書によらねばならぬが、然し此書は今はまだ我學界に譯述する程、一般の需要を豫期すべき性質のものではない。然るにリール氏には猶此他に「現代哲學入門」とも稱すべき著述がある。題名の如く入門の目的を有する講演ではあるが、其中に氏の

說を窺ひ知り得べき點が少なくない。而して其書を單に入門の書として見ても、普通の哲學概論と頗る趣を異にした點が多く、既刊の諸概論書に對して特別の地歩を占むべき價値がある。乃ち此の如き書ならば我學界に紹介すべき價値と必要とのあることは言を俟たない。

余は伯林大學で一年間リール先生の講筵に列し、又屢其宅に於て親しく教を受けたし種々の點に於て關係があるので、其說を詳に紹介する義務を有する如く常に感じて居たが、まだ其機會を得なかつた。會〻安井文學士が此入門の書を飜譯しやうとすることを聞いて衷心喜を禁じ得なかつた。それで余は初は安井氏と共に飜譯に從事しようかと思ひ、多少精密に氏の原稿を閱讀したが、其中種々の用務に妨げられて、到底其暇を得ないので、後には大體を通讀し、或は隨所に余の意見を吐露するに止めた。元來此書は講演の躰裁になつて居るから、普通の教科書風のものよりも難解の點が多く、遺漏なく其辭句を理會するには原著者と同樣

の該博なる知識を要する。從て通常如何なる飜譯にも免れ難き誤謬を免れる機會は、此書に於ても極めて得難いものたることは已むを得ないと思ふ。然し余は通讀の結果として、此譯書が原著の主意と精神とを傳へ得たるものたることは確信し得る。余は世の好學の士が此書によつて哲學上從來廣く傳はらなかつた方面の知識を得ることを喜んで、安井君の勞を多としなければならぬ。

リール教授が此譯書の出版を快諾せられて種々の便利を與へられたことは、余が譯者と共に感謝する所である。聞く所によれば明年は先生七十歲の誕辰を祝するが爲、其記念事業として、哲學研究者養成に關する何等かの計畫があり、廣く世界に同志の士を募ることとなつて居るといふ。此際此譯書の出版せられることは又好個の記念といはねばなるまい。

大正二年十一月

桑木嚴翼識

序

獨逸帝國は、終に敗れた。否、終に亡んだ。その雄圖、その覇業は、茲に再び、否、三度び、四度び迄も水泡に歸し去つた。一九一八年、獨逸國民は、一八〇六年の敗衂を幾層深刻廣汎ならしめた屈辱を經驗するの止むなきに至つた。——彼等は、彼等の敵の或る者に似ず、無言率直勇敢に戰つた。彼等は實に徹底的に戰つた。而して終に徹底的に敗れた。武士の情を知る者

は、敵ながら彼等の運命に對して一掬同情の涙なきを得ぬ。

人類の歴史は、その根柢に於て、終に我等人間の、完全に支配し得ざるものである。從つて獨逸帝國敗亡の深因は、遂に、之れを明かにするの由はない。

併かも尙ほ、强いて、その原因の一を指摘す可くば、世既に定論あるが如く、これをその軍閥主義に求めざるを得ぬ。獨逸帝國の揮へる劍は鋭かつた。併かも今にして之れを觀る、そは明に善き鋭き劍ではなかつた。

その軍國主義は、理性の下に統率せられた軍國主義にあらずして、實に權勢慾軍閥主義——私慾の奴隷であつた。若し、今年六月、獨逸國内の軍閥主義の專横を厭ひ、飛行機に搭じて、獨逸を脱し、丁抹に逃れし伯林大學醫科大學教授ニコライの言にして信ず可くば、獨逸帝國の軍閥主義者は、實に獨逸帝國憲法を蹂躙し、獨逸諸大學の誇、その光榮であつた大學の思想、學習、教授の自由を奪つたのである。彼等は實に手づから獨逸文化の源泉、從つて獨逸强力の源泉を閉塞涸渴し去

らんとしたのである。

＊　＊　＊　＊

往年獨逸留學の日、余は約一年の永きに亘つて老哲リールの講壇下に坐し、彼の明哲の言葉を聽いた。—彼の數學、生理學、その他の自然科學の蘊蓄深き哲學概論—哲學概論と言はんより、寧ろ彼の認識論一般を聽いた。彼の光彩陸離たる一般哲學史を聽いた。併かも彼がその渾身の精神を傾倒して之を力説し、之れを聽者の心に鏤刻せんと努めし所は、終に理性の勝利、理性の支配に外ならなかつた。余は今尚彼がソクラテスの哲學とその生と死を述べて、まのあたり聽者の心に、理性の勝利を描き出せる當時を忘れることが出來ぬ。數百の青年學生を以て滿たされた伯林大學の大講堂は、彼の言葉の下に、肅然として聲なく、余は彼の足下に坐して、感激の涙双頰を潤すを禁じ得なかつた。

理性の優越、理性の支配—之れ實に獨逸の哲學が、殆んど傳統的に高調力説して止まなかつた所である。併かも道堵傳ふるが如くんば、獨逸帝國の支配者は、

未だソクラテス、プラトンの所謂『哲學すること』をしなかつたのである。眞に理性を以て『私』を克服支配しなかつたのである。彼等はペロポンネツサス戰爭後に於ける雅典國民の如く、ソクラテス、プラトンを棄てゝアルキビアデスに追從したのである。……悲しまざらんと欲するも得ない。

理性の支配を缺いで、他の一切の權力は、終に崩壞せざるを得ぬ。折るゝは獨り劍のみではない、一切の權力―黃金の力も、政治の權も、此の理性の優越なくして、終に墮落、敗亡の力たらざるを得ぬ。進んで、日本國家の運命を、自らその掌中に握らんとしつゝある民主的一般日本國民は、深く思を爰に致すの要がある。

此の時に當り、リールの『現代哲學概論』が、友、安井辰衞君の多大の努力の下に、新らしき裝ひして、再び世に出づる、決して偶然でない。

＊　＊　＊　＊

大正二年の春三月、日本に向つて伯林を去らんとす

る前日、余は招かれて伯林郊外ワン・ゼーの湖畔に老師リールをその別莊に訪ひ、一日を彼の書齋と彼の食卓と彼の客間に暮し、彼に伴はれて、彼愛好の森林を散歩した。彼がニイチェを論じて、ニイチェの "redlicher Schritt redet" の一句を引き、ニイチェが如何に意味を具體化し、直觀化するに絶妙の天才を有せるかを語れるもその時である。今尚ほ余の耳に殘る "Ein Philosoph ist reif erst mit siebzig Jahren" (哲人は年七十にして始めて熟す)との彼の言葉は、實に其の日、彼の食卓に於て聞ける彼の言葉である。而して、桑木文學博士の依囑に依りて、安井君の日本譯書『現代哲學概論』の出版許可を乞ひ、その許を得たのも、實にその日のことであつた。

かくして安井君の『現代哲學概論』と余の奇緣は、既にその出世以前に結ばれたのである。而して生れたもの卽ち安井君の『現代哲學講話』であつた。

然るに、その後身を實業界に投じ、今日に至られしに拘らず、不斷その精神的向上の念を弛めず、その哲

學的著作の完成を期して止まぬ安井君は、第一版の成績を以て安んぜず、出版後幾干ならずして、既に、その改善完成に着手さるゝに至つた。然るにその出世當時結ばれた奇縁は、余を縛つて放たず、余はまた〳〵、微力言ふに足らずと雖、多少その生育、完成に與るに至つた。大正七年春四月、日本を去つて印度に遊ばんとするの前日、余は、神戸郊外の安非君の寓に、君と共に半日リールの書を繙讀審義するの樂しみを頒つた。

安井君は至誠の人である。此の安井君至誠の努力に、斷片微力ながら多少參與するを得しは、余の深く光榮とする所である。實にこの光榮の念こそ、余の一切の羞耻、躊躇の念を排して、余を驅つて、乞はるゝ儘に、此の一文を草するに至らしめた動機である。

余は、深く、リールの理性の哲學と、安井君の至誠と相結びて、此の書の、世に善を貢獻すること深且つ大ならんことを祈つて止まぬ。

大正七年十一月十五日

印度・ダージリン・イヤン・グレンの孤莊、孤燈の下に於て

鹿子木員信

原著の序

第一版の序

本書は自餘の哲學概論と其の形を異にし、もと著者が千九百年の秋ハムブルグに於て試みたる公開講演に基けるものにして、其の題目が許す限り依然講義の調子を保存せんことを努めたり。著者は又讀者を聽講者と見做し、その講義によつて敎說せんよりも寧ろ刺衝せんことを旨とせり。本書は科學者の裡に哲學の新伴侶を得、且つ哲學的努力に對する世人の理解に資せんことを欲す。而してその方途として先づ歷史より入れり。蓋し哲學はその本質たる、哲學のよつて以て發生し

たる人間精神が、古今を問はず同一なるが如く結局同一なり、從つて過去の偉大なる形態、系統及び人格は提拉せられ、哲學の發達の徑路はその起源より現在に至る迄一新紀元を劃したる轉機を通じて悉く探求せられざるべからざればなり。

千九百二年　　ハルレに於て

第二版の序

此の第二版に際して予は第一版の本文を周到に通覽せり。ソクラテス以前の哲學（第一講に於ける）を通讀して一般因果律を提唱したる第一人者としてデモクリトスの代りにロイキッポスを擧ぐるの至當なるを思へり。――本講義が受けたる好評は著者が此の講義を以て目的を達したりと判斷し、更に一層達すべしと期待するの誤ならざるを是證す。

千九百四年十月二日　　ゼムメリングに於て

第三版の序

第三版に於ても復本講義の本文は僅に文章上二三の訂正と及びロー

レンツ及びボアンカレーの著書の二三の引照を除き他は舊に依れり。

千九百八年　東海濱バンジンに於て

リール教授の哲學について

リール教授の哲學について

リール教授によれば哲學は一般科學的學問にして兼ねて又實踐的學問である。一般科學としての哲學は認識の批判であり、その對象は經驗そのものである。實踐的學問としての哲學は「精神指導の術」、「人間理性の目的論」である。形而上學は單に經驗の限界概念の理論として承認せられる、卽ちカントの意味に於て承認せられる。過境的存在は全然認識の對象とはならぬ。論理學は規範學ではない、只「思惟の對象間の最も簡單な關係の學」であり、卽ち「同一原理によつて思惟せられたものの分析」である。

認識論は「一般經驗の理論」であり、吾々の知識の根源を檢覈し、知

識の正當なる所以の根柢を確立する、從つて感覺の如何なる眞意義が感覺の相互關係と及びその空間時間に於ける共存繼次の意義と矛盾することなく調和するか、又如何に判斷作用が加つて感覺から知覺が生じ、一般に統覺せられた表象卽ち範疇が成立するかを明かにせねばならぬ。批判的方法は認識の觀念的要素と經驗的要素とを根本的に甄別せねばならぬ。凡ゆる認識は意識の先天的合法性によつて制約せられ、經驗內容を論理的に改訂することによつて成立するが、認識の可能なる所以は認識の形式と實在の根本關係との間に調和が存在するが故である。併し事物の限境が識れるのみであつて事物自體が識れるのではない。

直觀と思惟の形式は客觀的經驗の條件であり、同時に經驗的客觀の條件である。此の形式の中に最高の「アプリオリ」卽自己意識の同一性が顯現する。故に個々の表象は一般的經驗卽意識內容の法則に於ける特殊經驗の所產である。同一意識は先天的概念の根源である。「意識に結合せられて思惟せられないものは經驗することは出來ない」。同一を同一として認識する爲には認識作用そのものが同型であることが必要である。純粹自我の形式的統一卽ち主觀は經驗的自我と區別せねばならぬ。「自我」と云ふ單純な考、主觀であると云ふ考は常に到る處同一な考であり、意識一般の同一形式である。直觀形式(空間と時間)は實在そのものに妥當なると同一程度に於て意識に對して妥當である。空

間はその經驗的根柢を諸種の感覺の共存の中に有し、その論理的特性（同類性（グライヒ・アルチツヒカイト）と連續性（ステチツヒカイト））は自己意識の同一性から由來する。時間表象は自己意識の同一性と現象の繼次との結合から生ずる。自我はその同一性を表象の繼次の中に確保し、永續の意識を有つてゐる、空時は先天的要素と共に經驗的要素を有つてゐる。範疇は一般統覺的表象であり、統覺の一般形式であり、綜合の概念である。範疇は思惟の合法的性質であり、意識の形式的統一から發生する。範疇は直觀を竢つて始めて現實となる。因果律は理由命題を現象の時間的變化に應用したものである。意識の表象は特有の意志作用の意識から發生する。物質は實在である、但だ分量の不變と云ふ點に重きを置いた看方（みたか）である。

經驗の客觀に就いては「われ思ふ、故にわれ存す」(cogito, ergo sum)と云ふ命題が當嵌まる。「自分自身の存在を意識しつゝ自分自身でないものの存在を意識するやうになる」。感情は主觀的であるが感覺の內容は客觀的である。意識を刺戟する感情によつて外部的に吾々から派生しない感覺が現はれて來る。元來原始的意識は無記であり、自我も客觀も知らぬ。自我と客觀は卽ち此の意識から分裂する。吾々は感覺の壓迫によつて意識が意識と異れる實在によつて限界せられてゐることを經驗する。又反抗の感覺によつて他の物體の存在を意識する。吾々の意識に對しては對象の概念が對象を代表する。外界事物は經驗的自我と均しく物自體の現象である。物質は空間的力學的現象であり、決

して物自體ではない、唯だ思惟手段（ザンダミッテル）である。原子と云ふ概念は思惟の道具であり、決して實在的のものではない、唯だ思想上の事物である。自然の空間時間的、因果的、力學的直觀法は必須のものであるが、併し一面的抽象的であり、外界經驗の客觀に對してのみ妥當であり、單に實在に對する象徴として妥當である。

心理的（意識）は或る特殊なものであつて決して物質ではない、又量をもつてゐないからエネルギーでもない、「それは屹度自然界に於ける非エネルギー的事象であるに違ひない」。心理的と物理的とは同一事物の二個の現象と云ふよりも寧ろ同一事物に對する二個の觀察法である。但し汎心理論は排斥せねばならぬ。蓋し無機界に於ては物理的はそれに對應する意識的がない、有機界に於て始めて物理的に對して意識的對應が現はれる、併し物理的の結果としてゞはない。心理的と物理的との間には並行論が成立する、併し兩系列は決して同時に同一主觀の經驗に屬しない。世界は外界事物に關係してゐる意識に量的物理的過程と事物の關係として與へられ、その一部分は特定の有機的個體に對してその個體の意識的機能及その關係として與へられる。心理的と物理的との此の看方を哲學的一元論と稱する。「自我から看て感覺過程であるものも非我から見れば腦神經過程である」。意志が四肢を動かすのは意識過程として動かすのでなくして腦髓現象として動かすのである、何となれば物理的の系列は自己完結のものであり、決して非物

理的原因の挿入を許さぬからである。非規則的過程としての意志の自由は自然合法性を破るものではなからうか、併し此の場合の自由と云ふのは直接感性的衝動の壓迫から意志が獨立してゐると云ふ意味に過ぎない。

實際リール博士の世界觀は次のやうである。「感官によつて派生する實在と、感官によつて作用せられる事物とは同一實在である。既に最も簡單なる事物の中に働いてゐる同一創造力が吾々の中に吾々によつてその働を續けてゐる。此の創造力が自然と悟性の共通根源であり、事物に可解的形式を與へ、吾々に理解する能力を與へる。斯くて此の創造力が自然と思惟法則との間にかの調和を挿入した。そして此の調和を個物の中に捉へることが凡ゆる研究の目的であり報酬であるが、併し思惟は僅に無理に此統一を假定するを餘義なくせられる。此の創造力そのものは本質上永久に過境的であつて吾々の覗ひ知ることを許さない。又實在の秘密は思惟によつて穿鑿することは出來ない、即ち實在の原理は思惟に先行する、換言すれば、第一に實在があつて、次に思惟があるのである」。

併し實在は單に悟性によつて把捉せられるのみならず、心情によつて體驗せられ、感性によつて評價せられ、意志によつて追求せられねばならぬ。茲に觀念即ち價値が發生する。「吾々の精神生活は價値によつて覺醒し、價値にその根柢を置いて居る」。人生觀の問題は價値問題

である。價値は客觀的根據をもつて居り、價値は案出せられるのではなくして發見せられるのである。價値と目的とは科學に這入る餘地がないが、恐らく精神指導の術としての哲學の中に存在するのである。觀念は「意志問題」であり、尙未だ存在せぬ實有を創造するのである。

倫理學上の見解に就いてはカントの見解と似てゐる。道德法は凡ゆる理性的自然の世界的法則であり、宇宙的應用範圍をもつてゐる。倫理的行爲は全意志と合致する行爲であり、同時に各理性者が同一の境遇に於て行動するならば同一の方法で行動するであらうと云ふ行爲である。

大年九年十一月

譯者

Schriften :—
Realistische Grundzüge, (Vermittelung zwischen Herbart und Kant) 1870.—Moral und Dogma, 1871.—Ueber Begriff und Form der Philosophie, 1872.—Kausalität und Identität, Vierteljahrschrift für wissenschaftliche Philosophie, 1877.—Der philosophische Kritizismus und seine Bedeutung für die positive Wissenschaft, 1876–87 ; Bd. I, 2. A. 1908 (Hauptwerk).—Ueber wissenschaftliche und nicht wissenschaftliche Philosophie, 1883.—Lessing, 1883.—G. Bruno, 2. A. 1900.—Beiträge zur Logik, 1892.—F. Nietzsche, 1897 ; 5. A. 1909.—R. Haym, 1902.—Zur Einführung in die Philosophie der

Gegenwart, 1903 ; 3. A. 1908.—I. Kant, 1904.—H. V. Helmholz und Kant, 1904.—Plato, 1905.—Logik und Erkenntnistheorie, Kultur der Gegenwart, I. b, u. a,

現代哲學概論目次

現代哲學概論

吉林大學教授 リール博士著
文學士法學士 安井辰衛譯

第一講　哲學の本質と發展—古代に於ける哲學

前世紀の半頃に哲學の公開講演を試みようとした者があつたら、確に失敗に畢つたであらう。蓋し當時にあつては、最高の教養を受けた人々の間にも、哲學に耳を傾けるものはなかつたし、且つ又自然哲學の時代に錬金術の如きものを賞讃する徒として嘲笑の標的となつたであらう。

併し當時は恐らく何人も此の如きことを試みんとしたものはなかつたらう、又試みんとすることは出來なかつたであらう。當時の科學中に普く勢を占めてゐた確信によれば哲學は最早や生き過ぎた老軀に過ぎなかつた、恰も精神的發達の初期に屬し、今は全く死滅した生命形態のやうなもので、たかだか單に學究的の事

柄、歴史的回想、歴史的探求の事件と看做されて居た。當時又哲學の歴史が正しく哲學の學問そのものであると云ふことが謂はれてゐた。——此の語は恐らく哲學のその當時の一時の狀態と合致するものであるが、併し又とりもなほさず根本的に哲學の生命と將來とを否定するものである。

併しそれ以上進んで認識論や世界觀の一般問題を云爲することは全然學問的に價値のあることゝはせられなかつた。實驗科學や言語學や史學などの專門家は、プラトーやカントの學問を輕蔑の眼を以て看てよいものだと信じて居た。自然科學者自身の間からして、哲學を當時最新の形而上學的思索の體系と混同するの非を警むる微な聲が起り、又世人は哲學の承認すべからざる要求を排斥すると共に、その正當な要求を誤解せざらんことを求めたが、それは無益であつた。此の要求はいつまでも認められずに畢つた、而して是れは實に科學に取つて不幸であ

つた。科學は新に自ら自然哲學的冒險に捲込まれることを恐れて斷然思考と云ふことを禁じて仕舞つた。其れには好適の例證がある、即ち醫家の所謂「完全徹候」と云ふべきものがある。即ちエネルギー（當時世人が呼んだところによれば「力」）不滅の原則の最初の發見者たるロバート・マイエルは、其の原則の證明の爲に、經驗と實驗との外に、又思惟法則に依憑したと云ふ單純な理由で、形而上學に欺を通ずるものと批難せられた。

併し當時の人々も哲學を有してゐた、只自ら以て哲學と考へなかつたが故に、其の哲學を哲學と謂はなかつたのみである。而かも「物質と力」とを實在そのものとするかの二元的にして又判然矛盾する學說は、正しく形而上學と擇ぶところはない、否寧ろ哲學的思索より演繹して一體系とした凡ゆる形而上學よりも劣惡な形而上學である。

爾後かくの如き時勢は一變した。社會の廣い範圍に哲學的問題と哲學的攻究に對する同情と理解とが再び起つた、而かも自然科學の範圍に起つた。

ほんの昨日迄耳にしたことがないことが今は聞かれるやうになつた。即ち著名な一生理學者が千八百七十二年に「自然認識の限界」に就いて述べた。加之從來嚴禁せられて居り、又實際誤解せられ易い「形而上學的」と云ふ語が千八百九十四年一物理學者の遺著の中に現はれた。電磁的光學說の實驗的基礎を置き、電波と光波とが均しいと云ふことを證明したハインリッヒ・ヘルツはその力學論に述べて曰く、「概して吾々の精神に印象を與へた思想はそれが形而上學的であると謂はれる理由を以て棄てられるべきでない。あらゆる思惟的精神は本來自然科學者が見て形而上學的と稱する如き要求を有する」と。

自然科學の進步につれて又哲學の古い問題即ち人間思惟の最高にして最も包括

的な問題が自ら再現して新な攻究を要求する、又さうなくてはならぬ。自然科學的知識はいづれの領分よりするを論ぜず、益々その目的に近よれば近よるほど、それ丈け哲學的になる。エネルギー不滅の原則を以て外界自然を支配し結合する法則の全過程を發見し、又種の起源と進化の學說を以て生物學中に有機生活の統一と云ふ哲學的觀念を齎らした科學時代、卽ちかくの如き綜合の時代は、他人は慊らないかも知れぬが斷じて哲學的時代である。科學と哲學とは今日最早分離することは出來ない。

斯くの如く哲學に復歸せんとする現今の趨勢は又他の原因を有する。蓋し長い間吾々は自然科學の驚歎すべき業績に鼓吹せられて居つた、否寧ろ陶醉せられて居つたと云ふ方が適當だらう。技術上の發明、是れ實に十九世紀の尊稱であつたが、物質的生活は實に之れによつて改造せられた。——併し精神的生活をば同一の方法によつて改造し、發展することは自然科學の能くするところでなかつた。富や權力の蓄積によつて補ふべからざる缺陷を益々明かに感ずるに至つた。眞正の文化を形成して人間本來の職分を一層完全に遂行するには、自然科學の齎らした文明の外面的手段を以てしては尙未だ十分でなかつた。

彼の大戰爭は獨逸祖國の統一を促した、而して此時から一派の人士は常に少壯者の如く醱酵の狀態にあつて絕えず新事物を希求するに至り、前代の人々と全く異つた目的に向ひ、人生に對して新しい精神的內容を追求し、自ら人生の最重要なる問題に面接した。而して哲學は就中主として此の問題を解決せんとするものである。玆にニイチエの雄篇となり、急激な而かも廣大な感化を及ぼした。實に此の悲劇的思想家の獅子吼は暴風の如く前世紀の末葉に爆發して長く一世を風靡し、吾々が從來有して居た文化の根柢を搖がした。然かも單に破壞し、過去の價

値を破棄するに非ずして新しい價値を創造するものであつた。而してニイチェが豫言したもの、詳しく言へば眞僞は暫く措いて渠が建設した理想の裡に、正しく渠の功果を得た秘密がある。ニイチェは自ら人間の超人的未來を洞察したものだと確信した。實に渠は「野に叫ぶ人の聲」であつた。而して文化刷新に對する當時の熱望は一齊に此の聲に傾聽したのである。

予は此の諸方面より見て哲學的努力に好都合な時期に於て、哲學的啓蒙を未だ嘗て例の無いほど熱心に追求し、攻究しつゝある時代に於て、諸君に語ることが出來るのである。予は實に現況の前途多望なるを感ずると共に、又此の現況に附隨した責任を感ぜざるを得ない。

確に時勢は一變した、其れと同時に哲學も亦一變した。——哲學は改變した、改變してゐないとすれば必ず改變しなければならない。哲學は「世界の謎」を解決するのが其の問題であると云ふが如き妄想を永久に脱し、殊に又之を勞力を要せざる空想の方法に訴へんとすることを避けねばならぬ。哲學は吾々の精神を養ひ、意志を強固にする識認を措いて再び魔醉劑を提供し、想像力を以て悟性を溷濁してはならぬ。一言以て掩へば哲學は形而上學的であつてはならぬ。事物の背後に事物の實在を求めてはならぬ。將來かゝる誘惑に抵抗し得んとせば、就中、哲學の眞面目の天職に關する明晰なる觀念を作らなければならぬ。今日に於ける第一の哲學的問題は哲學其のものを問題として提供することである。哲學は將來如何なるものたらんとするか、如何なるものたるべきか。——哲學は如何なるものたりしや、如何なるものたるか。

此の問題に對する解答として某の哲學者の某々の學說を以てするを許さない。斯くの如くするとも單に種々の說を得るに過ぎない、又其の一致點を求めようと

すれば、其れは既に哲學の概念を假定してゐる。此れに反して如何なる方法を採るべきかは明瞭である。即ち哲學は何であるか又何を意味したかは哲學史によつて知ることが出來る。茲に哲學史家の偉大なる問題と效績とが存する。哲學の歴史は畢竟哲學の概念の發展と變化との歴史である。

從つて余は主として史的觀察によつて、哲學の問題を充分に理解する端緒を求めたいと思ふ。併し余の意見を理解せられんが爲に、余は先づ此考察の主要なる結果を豫め陳述しよう。但し之を以て諸君が信ずべき信條とするのではなく、たゞ余の研究によつて諸君を導かんとする目標としようとするのである。

圖扨て哲學の名稱と實體とは其語(註フイロソフイーは希臘より來る)が示す如く希臘精神の創造であり、元來唯希臘哲學があつたのみである。科學的と云ふよりも寧ろ詩的素質に富んでゐた國民の仕事であつた。哲學を以て純粹歴史的のもの、過去のものと考へる者は、此點によるのであらう。何となれば希臘哲學即ち「哲學そのもの」は實際歴史的過去の者となつたからである。而して吾々は又之れを一の全體として通覽し、完結したる事實として檢覈し、理解することが出來る。是に於て哲學の本質如何と云ふ一般問題は、先づ希臘哲學の本質如何と云ふ特殊問題に移つた。故に吾々は今日哲學の發生の時代、其の初めて華咲き實を結びし時代、即ち希臘の古典時代に於て、哲學は何であつたか、哲學とは何を意味したかを問ふのである。

哲學史が此の問題に答ふるところは、誤解することが出來ないほど簡單にして且つ一定してゐる。曰く哲學は古代に於ては科學と全然同一であつた。古代亞歴山時代迄は、哲學以外に又は哲學と併立して他に科學はなかつた。哲學は時代の經過と共に派生した一切の個々の自然科學の共通の根源母胎である、そして又恐ら

く個々の自然科學が之に趨き、其完成の時に之に復歸せんとする最高の目的であり、自然科學の豫期的體系である。

古代に於て哲學の外に科學が存しなかつたと云ふ事は、古代思想家の事蹟や證據から容易に證明することが出來る。數學は未だ嘗て獨立の科學として通用しなかつた、即ちプラトーは數學を哲學の前梯否哲學の一部とした。彼は斯く哲學と科學とを固く同一視してゐたが、然かも又其豐富なる經驗的知識によつて、根本的科學即ち哲學を其著書の中に始めて個々の部門に分割した。アリストテレスは哲學の意味を全然今日吾々が言ふ科學の意味に解した。加之彼は屢々哲學の語を複數に用ゐた、即ち「Philosophien」と謂つたのは、今日吾々が「Wissenschaften」と言ふと同一である。古代の哲學は實踐的意味を包含せずして純粹理論的目的を追求する限り、皆古代科學である、換言すれば希臘時代に於ては科學そのものである。斯くの如くにして吾々は尙進んで次の如く言ふことが出來よう、即ち其後の近世哲學も又其後の近世科學を全體として見たものゝ外に求められない、又古代に通用した哲學と科學との同一觀は又現時に於ても依然として通用しなければならぬと。故に單純に古代の哲學が近代の科學に變形したのは、恰も餘り發達しない古い生物體が、非常に發達した新しい生物體に變つた如きものである。此の結論を以て吾々は哲學の存在問題が決定せられたと信ずるのである。

されど哲學は何れの時にも竟に科學たるを以て滿足しない。單に宇宙（コスモス）のみならず——世界を支配してゐる美しい秩序からして希臘語の美的意義に於て世界を宇宙と稱する——單に現象と云ふ粧をつけた可視的宇宙のみならず、精神の內的方面も既に古代に於て哲學的觀察の對象であつた。「精神內にも又宇宙がある」。而して此の宇宙を始めてソクラテスが哲學の內に取入れたが、是に於て哲學の新

しい概念、即ちプラトー流の概念が生じた。之を此のソクラテスの大後繼者の言を藉りて云へば精神的事物の哲學である。此の哲學を再び科學として示さんとするならば、其の本質を誤解し、其の本來の效果を撲滅するに畢るだらう。

吾々は人間精神を或る他の事物と同一に觀察することは出來ない。縱令心理學が生理學と結合して人間精神の機能と發現の要件とを分析し、個人精神と共に社會精神の發展の法則を穿鑿しても、それは單に理論的問題を解決したものであつて、精神の本質には觸れてゐないと云ふことは、此場合特に云ふことが出來る。元來科學そのものは價値の概念を知らない。科學は認識するのみで評價しない。病理學者に取つては健康と疾病とは均しく法則に支配せられる生理現象であるが如く、眞正の判斷、不正の判斷及び正當の動作、不正當の動作と云ふことは純粹心理的研究の對象としては、只その條件と結果の點に於て區別せられるのみである。併し精神生活に對しては純粹科學的觀察の外に尙他の觀察點がある。此の觀察は價値を發見して精神特有の世界に侵入する。然るに價値を發見すると云ふことは同時に價値を體驗（エルレーベン）すること、詳しく云へば價値を自ら新しく創ることである。故に哲學は價値から出發するときは純粹科學でない、若し價値判斷を試みるならば科學以上である——價値判斷に觸れないならば科學以外のものである——精神指導の術である。さればプラトーは哲學の特質を示して「生活の形」と謂つた。

是に於て哲學の著述中に哲學者の人格が何故に爾かく重大なる意義を有するか、何故に哲學者の人格がその教說の中心點から體現し、口演しつゝ生き生きと現はれるかを知る事が出來る。精神の指導には自ら指示する道を先行する指導的精神がなければならぬ。尤も科學の著述に於ても研究者否大研究家の人格的關與を蔑

視してはならい。併し其れは全く背後に隱れてゐる。縱令ガリレオの落下の法則と云ひ、ニュートンの引力說と云ひ、其他自然科學上の理論法則をばその發見者の名によつて呼ぶことはあるけれども、それは始めて自然界から一の新法則を抽出す爲に必要な、明晰にして深刻な、而かも詩的な一瞥を自然界に試みた人に對して今現に感謝するに止まり、必ずしもその際に於ける研究者の人格的影響を考へるのではない。之れに反して科學と異れる哲學に於ては、その創始者は一定の方法で依然其の哲學中に生存を續けてゐる。故に單に哲學の科學的概念を了解したと云つても、其の全本質を理解した所以ではない。斯くの如き徒は往々にして哲學を輕視し、哲學の歷史を以て單に徒勞の研究の排列であると云ふ風に考へ易い。此の徒は哲學的人格が歷史から抹殺せらるべきものでないと云ふことを忘れたものである。例へば古代に於てはソクラテスやプラトーや、近代に於ては意志の自律、理性の自由と自律卽ち眞の「君主道德說」を唱へたカントの如き有力なる人格は單に其の時代に影響を及ぼすのみで止むものでない。實に人格は哲學本來の創造力である。而して此れは常に一般人間的目的に充ちた一般人間的意義を有する人格である。從つて斯くの如き人格は一般に理解せられ、自ら精神の指導者たるを得るものである。

斯くの如くにして世人は明に理解しては居ないが、科學的意義より來る概念と哲學者の人格より來る概念との兩概念が古來哲學と云ふ名稱と結び付いてゐる。從つて兩概念の結合が哲學と云ふ概念に於てよく統一を保ち得る所以を明にすることが問題となる。併し吾々は先づ哲學の科學的問題を、その非科學的職分に對する關係と切り離して考察せねばならぬ。以下試んとする講義の性質上現實の生活や史的事實に於て結合してゐる兩者を暫く分離して考察しつゝ、實際合同して

作用するものを前後相繼起するものとして說明したい。

吾々は古代の科學即ち古代の哲學を輕視するものではない。主として科學的方法の改良に歸すべき、範圍の擴張して殊に一層精確となつた知識を標準として、古代の哲學說を評價するのは、恐らく正當であるまい。今日の自然科學の祖とすべき彼のイオニヤ學派の自然哲學者の言說は輙ち實に哲學を開始したものであるが、其の命題は一見すれば背理の偶感の如く、或は考慮を値しない未熟の思想のやうに見えるだらう。併し歷史的に考へるならば、タレースが萬物は水より成ると謂ふ說は、其れより以前の純然たる神話的寓話的自然觀と絕緣したものとして決して輕視すべきでない、又思想が獨立する端緒を開いたものとして決して輕視すべきでない。蓋し人智の進むに從つて、神や世界やその他森羅萬象が造物主によつて創造せられたとは考へないやうになり、神統論（テオゴニイ）や宇宙開闢論（コスモゴニイ）は退いて科學に席を讓らねばならぬ。初めは宇宙の森羅萬象を想像を以て解釋してゐたが、漸次之を感官に訴へて研究し得べき根據即ち根本物質に歸せんと試みるやうになる。一言以て掩へば、人間精神の純粹理論的衝動が覺醒する。アリストテレスも、何等實用の爲でなくして純粹理論的衝動から出たと云ふ點で、タレース及び其後繼者の學說を科學だと斷定した。此の科學は諸多の中獨り自然であり、從つて此の學說を超人的にして神的だと云つて差支ない。何となれば此の學說は實用的でないが爲である。

然かも尙科學の幼稚な時代であるからタレースは其の問題を分割せざる全體として摑んだ。此の研究の一般問題を個々の問題に分割し、別々に精密に研究し、更にその結果を結合せねばならぬと云ふことは、餘程後に至つて始めて心付いたことである。最初は直に萬象全體即ち有と全一とを思索の題目とした、即ち萬物

は其起源と原素とより言へば一であると云ふのが其の最初の說であつた。併し當時に於ても重要なる點を看過してはゐなかつた。――最初の科學が出發した問題は、科學期前時代の思想家の神話から受け繼いだのである。只神話の作者は誰が萬物を創つたかと云ふことをお伽噺的に解釋し、「カオス」の子たる「エレボス」や、世界を作る爲に「エロス」に變化した「ツオイス」や又「變化の親」たる「オケアノス」と「テティス」などを藉りて來て萬物の生成を說明した。故にタレースの問題そのものは少しも新しいものではないが、其の問題に對する解答は極めて嶄新にして意義あるものと云はねばならぬ。「オケアノス」と「テティス」とはその人格性を脫した。換言すればタレースは象徵の代りに實物を採つた。從つてタレースはニイチェが云ふ如く、其の提起した問題は神話作者と同一部類に屬するに拘らず、哲學者即ち自然研究者の先頭に位することが出來るのである。故に彼に於ては其の新知識は同時に延いて事物的認識を包括してゐる。而して哲學は本來科學の原始に位するものであるが、同時に又科學の終極であると信ずるやうになつた。

總じて歷史上の原始は恰も幼年時代を追懷すると同じやうに、興味に富んでゐて人を惹きつけるものである。其の免れ難い粗雜閒然な點も、却つて人の感興同情を惹起するものである。哲學的思惟の始めは均しく始めではあるが、現今の科學の始めとは全く異つた意義を有するやうに思はれる。蓋し人閒の思惟が最初の神話的覆面を脫するのは容易でない。動もすると今日の自然科學者の先進者たる古の「物理哲學者」(フィジオローグン)は神話的言語に復歸せんとした。斯くして此の「物理哲學者」中の最有力者にして、其の系圖も性情も均しく高貴であつた思想家たる彼のエフエソスのヘーラクライトスは、其の比喩のやうな談論と謎のやうな格言との爲に、古代の人々から「不可解者」と稱せられた。

喝・喝・喝

ヘーラクライトスが追求するものは轉化に於ける一定不變の法則と、現象に於ける必然と度合とであつた。渠は其心眼を開いて一見常住と見える萬物も、絶えず變化し、生滅するものであることを看破して、「萬物は流轉する、何物も固定せず」と喝破した。渠は又火に就いて述べて、火の變態の中に生滅變化が最も善く現はれると考へた。然るに此の火そのものは本來運動とエネルギーとに外ならない。故に元素の恒常性の代りに法則の恒常性と云ふことが問題に上つた。其の法則は即ち「ロゴス」であり、「依つて以て萬物が生起する共通の言葉」である、そして其の執行は「法律」によるのである。「エリニエン」(復讐女神)を侍者とする「デイケイ」(正義の神)が凡て平衡を失し度を過すことを正すのである。吾々は此の神話的說話中の非神話的意味を理解することが出來る。ヘーラクライトスが片言隻語を以て、轉化とその恒常不變の過程に就いて述べたことは實にショーペンハワーの說と一致する。即ちショーペンハワーによれば「物質の實在はその作用に外ならぬ、物質は只作用するものとして空間を充たし、時間を充實する」のである。又ヘラクライトスの考は物質を種々の形のエネルギーの結合に歸せんとする現今物理學の趨勢とも一致する。現今最も深遠な科學者の一人は其の晩年にヘラクライトス風の謎の如き說を吐いた。即ち「萬物の眞相は連續したる運動形式であり、不變の實體と見ゆるは現象である」(「連續的運動形式と現象的本體」)と云ふのがヘルムホルツが死ぬる前に試みんとした講義の題目である。一見不變なる事物は互に競合する諸力が暫時平均するに依りて生じ、運動傾向が隱れるとき現象的實體となると云ふことは、現にイオニア派の自然哲學に於ても認めて居たところである。自然の法則は一切世界の法則であり、人類社會の法則即ち倫理的政治的法則も亦ヘラクライトスに依れば一般自然法則の分派である。「凡ゆる人間的法

則も亦神的法則によつて支へられる」。人間は意志を有し、且つ意志の力によつて國家、法律を創めるけれども、自然の相互關係の聯鎖と必然とを破るものでない、寧ろ意志を以て此の聯鎖の中に閉ぢ籠るものである。――永久不變の同一標準、即ち變化に於ける「ロゴス」と云ふ觀念と結び付いた古代の自然法則說は、斯くの如く解釋するとき、甚しく深遠にして徹底した意味を有するものである。

扨てヘラクライトスの哲學に於ける歷史的及人格的要素は如何。「アゴン」即ち競爭の文明建設上の意義を明かに目睹した希臘人にして始めてかゝる思想を發見することが出來たのである。即ち「一切の根柢は反對の鬪爭である」。「戰は萬物の父にして且つ王である」。希臘人にして始めて斯かる考を世界秩序を辨明する立論點、即ち「宇宙辨正論（コスモデツエー）」の根柢としたのである。吾々も亦「生存競爭」の語を用ゐ、優越の鬪爭即ち善と貴との爲にする競爭を承認し尊重する。併し事物の原理、一切現象の根本形式としての「アゴン」――是れヘラクライトス哲學の歷史的要素である、即ち國民的に制約せられた部分である。從つて今日では單に概念に表はし得る過去に屬するもので、吾々が同棲し得る現代生活には屬して居ない。

予は重ねて言ふ、吾々は古代の科學即哲學を蔑視するものでない。吾々は眞にアナクサゴラスが「事物の總體は增減するを得ず、其の量は常に同一である」と云ふ命題に驚く。此の命題が主張するところの、萬象は量より云へば變化するものでないと云ふことは、吾々に取つても亦一般の前提として、最も包括的なる自然法則に對する思惟形式として、即ち物質並にエネルギー兩者の不滅を說く原理として、現に通用して居る。此の原理の完全なる證明に缺ぐべからざる主要なる部分は既にアナクサゴラスが之れを認めて居たと言へる。アリストテレスの云ふところによれば、ソクラテス以前の自然哲學者即ち物理哲學者は、何事も無より生

ぜず、何事も無に歸せずと云ふ確信を有して居た。例へばロイキッポスやデモクリトスの如きは此のアナクサゴラスの命題を爾かく言ひ表はして居るのである。又自然研究は一個の假定を以て其研究の對象に向ふものであり、其の假定は一切の現象によつて常に確證せられ、決して反對の事實によつて否定せられない。若し偶々外見上此假定と矛盾するやうな事實を發見しても、研究者に取つては寧ろその矛盾を除去しようとする衝動刺戟となるに過ぎない。此の假定卽ち法則は吾々をして自然界に於ける原因を探求し得べしと信ぜしむる變化の必然的聯結と云ふ假定卽ち法則である。併し此の法則を僅かの語句で明瞭に言ひ表はした者は予の知れる範圍に於てはロイキッポスである。曰く「何事も偶然に生起するものに非ず、凡て何等かの理由より必然的に起る」と。理由と云ふ語が示す如く、必然性は事物に措かれた强迫を意味するものではない。ロイキッポスの意味——此れは又今日の自然科學者の意味である——は一切の現象は規則的であつて、現象の形式は吾々の思惟の形式と一致するが故に、吾々は一切の現象を理解することが出來ると云ふのである。卽ち必然性に關する此の重要なる意味は既に古代哲學者の考の中に存して居つた。デモクリトスはロイキッポスから物質の構造に關する假說を受繼いだ。此の假說は不可視的極小中に存する相關關係を吾々の精神に可視的になし、數學的に取扱ひ得るやうにする爲の直觀的なモデルであるから最好の假說である。此の假說は外ではない、原子說である。勿論デモクリトスは現代多數の自然研究者すら識らぬやうだが、之を假說として取扱はねばならぬと云ふことを識らなかつた。卽ち彼は原子を以て完全なるものと考へ事物の模像だと考へた。

希臘人の思惟は、思惟のみで事物の認識に達することが出來る極點に達した、卽ち思惟が實驗の助けを藉らずして把捉すべきもの、思惟が自己から發展すること

とが出來るものを、希臘人は既に把捉し且つ自己から發展した、即ち凡ゆる經驗に對して形式を發展した――縱令希臘人はそれを形式と云ふ名稱では呼ばなかつたし、又それをその本來の意味に就いて誤解したけれども――と云ふことを敢へて主張することが出來る。但だ思惟と事物とが尙混同してゐた。思惟の法則を無制限に事物そのものゝ法則と考へた、即ち思惟が尙批評的になつてゐなかつたと云ふことが出來る。詳言すれば思惟は尙自己を反省しなかつた、自修しなかつた、研究の具としての自己を研究の內容から區別することをしなかつた。併し古くはあるが、その實甚だ幼い思想を以上の點で嘲るのは無理であらう。

古代自然哲學が科學である限り、その業績は主として後世の精確な自然知識に對して輪廓を確定し、此の知識に對して根本概念を發見することに限られてゐる。プラトーの方法論とその數學的傾向の中に、恐らく科學の將來の發展の萌芽があつた。併しアリストテレスは之れを發展しなかつた。アリストテレスの目然哲學は寧ろデモクリトス、プラトー以前の自然哲學に原理上復歸したものだと云ふことを確信を以て斷言することが出來る。從つて古代に於ても科學が絕滅しなかつたことが判る。そして此のことはアルキメデスと云ふ名によつて誰でも想起するだらう。渠の科學は既に吾々の謂ふ科學であつて、而かも古代哲學の輪廓から發展したものである。

古代科學と近世科學、即ち古代哲學と近世哲學とを區別する所以は研究の對象ではなくして單に取扱方によるのである。尤も既に古代に於ても醫學の方面即ヒツポクラテス派は概念の方法論に對して、概念を現象から導き、現象によつて證明するところの研究の方法論を措き換へやうとする企を試みた。但し此の企は希臘精神の特性即ち藝術的の天性と藝術的の考へ方の勝つてゐる爲に失敗した。

希臘の思想家は思惟の有する觀念を直接に感官の直觀に移した。彼等は一切の事物に對して思辨的であり、又實際自己を以て一切の事物を反映する鏡に比した。併し鏡の反映は事物の光線と混同する。數や空間關係の中に存してゐる規則正しい性質は、希臘思想家の藝術的精神と何等か類緣のある者と感ずるが如く、又外界世界はその關係の調和に於て、その大さの美に於て、此の內面に存在する規則正しい性質を反映するやうに思はれた。そして概念を構成すると云ふ希臘人特有の技術を以て、自然の構造を模倣し、世界の模像を作らうとした。希臘人にとつては綜合が第一である。

現代の科學は之れと違つてゐる。現今自然科學の問題は全體に對する最高の一般性に向はないで、現象を個別的に理解しようとする、そして就中常に司一方法に於て眼前に反覆する平凡な日常の自然過程を了解しようとする。蓋しいづれの處たるを問はず、若しも自然が證明せられるならば、その根本法則は發見せられるに違ひない。併しそれは方法的に發見せられねばならぬ、而かも他の法則の作用と協働してゐる具體的現象から抽出せられねばならぬ。從つて科學は第一に分析しようとする、換言すれば現象を思想上簡單化し、然る後ヘルツの言を藉れば思惟的に必然なる結果が、對象そのものゝ客觀的に必然なる結果であるか否かを檢する爲に、此の最も簡單なる結果を究局まで發展する。これが甘く出來上ると此の結果を任意に理論上の標準に採用して、觀察せんとする量を測定するのである。

斯かる現象の分析、それより導かれた概念の發展、觀察實驗によるその概念の證明を稱して吾々は經驗的方法と云ふ。此の方法の發見と共に吾々の意味に於ける科學が可能となる。而かも此の方法の發見は同時に本來唯一なる總合科學即ち哲學を、益々增加する多數の特殊科學即ち實證科學に分解すると云ふ結果を屹度

生ぜずには措かない。

第十七世紀以來哲學の外に又は哲學と對立して科學が生じたことは哲學將來の發展にとつて甚だ重要の意義をもつて居る。蓋し玆に於てか最早哲學は一般科學でなくなり、從つて哲學の科學に對する關係が問題となるに至つた。

直接に近世科學の業績から見れば、哲學に對する科學の關係は甚だ單純に決定せられたやうである。近世科學は古代哲學の進歩補遺を以て任ずる。希臘科學は近世科學の前梯として表はれた、――前者は約束として後者は履行として。――そして一見するときは此の見解に反對することは全く出來ないやうに思はれる。古代哲學の對象であつたものが近世科學の對象となつた。近世科學は古代哲學が到達せんとして努力したもの、即ち外界の認識と精神の認識に到達し、若しくは到達せんとする途上にある。古代の哲學は實際近代の自然科學即ち近代の物理學、化學、生物學に分解したと云ふことは爭ふべからざる事實のやうである。アリストテレスの心理學は進歩して現今の生理的心理學となつた。近世科學は之れを綜合すれば全く古代哲學とならねばならぬやうに思はれる。蓋し同一對象に就いて二個の科學、二個の眞理はあり得ないからである。――故に哲學が生き殘つたと主張する說――予も爾か云つた――は正當なりとするも哲學が近世科學に變化したと云ふ方が一層正當であらう。然らば哲學は尙何を研究するか。今日哲學は大學の講堂や學者の研究室に存在してゐる。即ちデモクリトスの哲學、プラトーの哲學、アリストテレスの哲學は現代の物理學や化學の中に吸收せられて、其處に近代的樣相を具へて盛行してゐる。

玆に於て進んで科學としての哲學の可能と權利とを確立することが問題となる。吾々は先きに精神指導としての哲學を區別したが、此の區別は暫く許して置かね

ばならぬ、即ち議論を明晰にする目的の爲に許して置かねばならぬ。吾々の問題は實證的科學と並んで而かも之れと別に一個の科學的哲學が存在するか否かである。――斯くの如き科學的哲學が存在せねばならぬとすれば、他の如何なる科學說に比しても確定精密の點に於て劣つてはならぬ。且ガリレオ以來認められた科學的知識の條件を缺いではならぬ。此の條件に照らして此の問題の性質と意義とを考へるときは此問題は一層切實となる。哲學は特殊科學でなければならぬ、然らすんば儼に自餘の科學と同等の地位を保つことが出來ない、而かも同時に一般科學でなければならぬ、然らずんば哲學たることが出來ない。

實證科學の總體即ち體系を哲學と稱せんと欲するならば――これ實に哲學の最廣義の概念である――世には一個の哲學ありて一人の哲學者なしと云ふ不可思議な結論に達する。蓋し一切の科學を包括する人間能力は存在しないからである。

併しかくの如き科學的知識の聯結は唯僅に科學的知識の現狀の百科全書的知識であつて一個の辭書たるに過ぎない。斯くの如く一切の科學を統一し、ヘルバート・スペンサーが云つたやうに「一にする」こと、詳言すれば科學的知識の共通點を一個の法式に表さんとする企は「綜合哲學」の好例が示した如く、單に皮相な類推、比喩たるに止り、嚴密な同一概念(Gleichheitsbegriff)に歸することは出來ない。

以上吾々の問題とするところは、古來の歷史そのものに徵すれば、よく釋然たることが出來る。蓋し實證科學の發展につれて實證科學から一個の問題を生じた。此の問題は古代には全くは知られなかつたが現時に至つて始めて其の全意義が明になつた。科學そのものに關する問題、換言すれば科學の假定及限界に關する問題即ち之れである。科學の性質及範圍如何と云ふ問題は哲學的根本問題であつて實に理論的哲學の對象である。哲學は此の問題を提げて他の一切の科學と交

渉して來た、而かも此の問題は諸種の科學中の或る一科學の片手間の仕事とせられてはならぬ。實證科學は經驗の各對象に分割せられ、例へば甲科學は運動の一般法則より物理過程を說明し、乙科學は諸原素の特性に附隨する結果を研究し、丙科學は生命現象を物理的化學的原因に還元しようとする如く、科學は種々の經驗を根柢として經驗を作くるに反し、科學的哲學の對象は全一經驗そのものであり、且全一經驗そのものとしてである。

研究的科學と相並んで批判的科學がある。此れは知識の根源を檢覈し、知識の範圍を確定するものである。科學的研究家にして同時に哲學的思想家たる者は、斯かる批判が最高の科學的實踐的意義を有することを知つてゐる。ヘルムホルツは認識根源の批判を以て「永久に哲學に存續し如何なる時代と雖批難せられることなく之を除却するを得ざる仕事である」と謂つた。批判と云ふ羅針盤を缺ぐときは、科學的知識は往々にしてその目的を逸脫する弊に陷る。此の羅針盤に諸らないときは、人間を以て全然純粹理智的にして就中感情行動を度外して單に智識を本務とするが如くに誤解し、常に科學のみを以て世界觀を構成しようとする。科學が自己認識たる批判を缺ぐときは自然科學萬能の時代となり、人間を事物と同視して抽象的物質の一片、數學上の力の綜合なりとし、又知識の一端を以て其全般である樣に伴り、斯くして自然科學が一時唯物的形而上學に加擔するやうに見えると云ふことはあり得ることである。

感覺世界は直觀に現はれる限り無制約的でなくして制約的である、詳しく云へば現象の總括であつて、その現象の種類と形式は感官の感じ方と直觀の形式に依存すると云ふことは認識批判の結果であつて、吾々の世界觀に重大の意義を與へ

るものである。必ずしも形而上學者が求むるやうに現象の背後又は彼岸を待たずして吾々自身の中に物理的世界の外に尙他の世界がある、精神的價値の世界卽ち之れである。

批評哲學は精神指導としての哲學に進路を拓いた、換言すれば吾々の生活の觀念力に對して權威と活動とを與へた。此の觀念力は吾々を高上して超感性的たらしめるものではないが、非感性的たらしむるものである。批判哲學がなかつたならば、吾々は價値の存在、價値の價値に就いて何ごとをも知らなかつたかも知れない、又は價値の存在、價値の價値と云ふ信仰を失つたかも知れない、從つて日進月步の精神的文明に對する刺戟を失つたかも知れない。

哲學の此の二重にして而かも統一結合せる職責は甚だ重要である。蓋し哲學は人間に對して生命ある世界觀を與へんと努むるものであつて、此の世界觀は人間本性の全方面に發露するものである。此のことは哲學の對象ではない、恐らくその目的であらう。哲學は一方人間の情意的要求を顧みつゝ、他方科學と提携して此の目的に到達しやうとする。哲學は精神最高の趨好と合致し、かねて眞個の科學、人智であり、人間にその眞の目的を發見し、指示し、之れによつて意志を嚮導する。古來の偉大な哲學は卽ち大思想家の哲學であつて人類の理想に貢獻した。

カントも亦哲學の二重の概念を區別して、その一方を稍古風の語で「學校概念（シュール・ベグリフ）」と謂つた。此の意味に於ては哲學は認識の體系であつて知識の統一を目的とし、認識の根柢を研究し、一切の研究の評價を認識し、哲學化するに役立つ特異の科學である。此の概念の上に而かも此の概念と結合して、カントの語を藉れば「世間概念（ベグリフ）」が超出して居る。此の意味に於て哲學は理性の根本目的に對する一切の認識であつて、哲學者は「理性の立法者、理想の教師」である。——併し此れは大問題

であつて、輕々しく自ら哲學者を以て擬してはならぬ。カントの言ふやうに「此の意味に於て自ら哲學者と僭稱し、僅に理想界に存すべき眞哲學者と同一だと自負するのは甚しく虛名を貪るものであらう」。自ら哲學の學者卽ち哲學の目的に達しやうとして焦心する者と稱すべきである。そして自己に理性の自律を實現し、己に克ち、自己の運命を支配し得る程度に於て哲學者たることが出來る。

以上を以て以下の講義を開始し發展すべき大要の趣意を述べた。講義の順序として先づ哲學の理論的方面より講ぜんとするに當り、予は努めて之れをその創說者の人格と結合して、出來得る限り明瞭にしたいと思ふ。

第二講　近世に於ける哲學—科學に對する關係

千五百四十三年ニコラウス・コペルニクスの歿した歲に渠の「天體運行論」と「天體軌道論」とが現はれた。著者は自ら之れに附記して謂ふ、玆に人智の新時期が開かれて世人は科學の歷史に於てコペルニクス前期とコペルニクス期とを劃せねばならぬと。

天體運行の規則正しくして一絲亂れざるを觀るときは必ず科學的思惟を喚起して、玆に先づ自然法則と云ふ槪念を生ずるであらう。又數の科學も日月の循環の自然的期間と結付いて居る。吾々は晋程の例から感官的印象の特性が數量的關係と密接の關係を有することを知り、此の發見と共に自然の量的研究に一步を進め

たかの古代自然哲學のやうに自然を解釋する、――天體の運行の理論を構成するに當つて好果を收めたところのピタゴラス哲學のやうに自然を解釋する。紀元前第二世紀に於けるピタゴラス派の哲學者アリスタルフ・フオン・サモスは地動說を創說して太陽中心說を唱へた。あまり早く生れた古代の科學的思想と均しく、此の大膽な思想は存續することが出來なかつた、そしてコペルニクスを俟つて改めて提唱せられねばならなんだ。渠は意識的に古代の先行者に對して新に此れを起した。渠は實にケプレルの時代迄星學と謂つたピタゴラス哲學を再び復活しやうとした。

何事が起つたか。――今尙ほ想起すべき貴い犧牲を拂つて、新說が興つてきて漸次勝利を占めた。――此の新說の意義は錯雜せるトレミー說よりも一層簡便に星學上の算式を整頓すべき方便に過ぎなかつたらうか。勿論此のことは此の新學說の第一の結果で又當時の知識程度に於ては唯一の確な結果ではあつたが、此れのみでは新學說の全意義は說明せられない、その全意義は此れのみでは盡きない。太陽中心の思想はその純粹星學的結果以外に甚だ廣汎な影響を齎らした。

何事が起つたか。――感官の朴素的直觀が科學によつて訂正せられた、否反對せられた。思惟が事實に對して第一の高慢な捷利を博した。否地球が世界の中心から引出され、人間や人間の運命が忽然として重大な意義を得たのである。卽ち人間を最も近くから看、又人間を當面の目的として看察したのである。之れに反して從來の月ゆる哲學宗敎は、人間の自然に於ける卓越した一面的位置を看て、此れを人間の本音だと極めてしまつた。然るに世界の中で最も堅牢なるもの、否實に一切地盤の基礎たる地球が突然足下に動搖し、飛去り始めた、それと均しく又一切の人間的價値が動搖し相對的になつたやうに見えた。――併し注意すべきは

只人間的價値のみである。新學說は先づ人間、人間歷史、その歷史の棧數を無限に抑壓するやうに見えて、人間を侮蔑するやうな點をもつてゐた。

併し又此を遠つて解釋することも出來る。卽ちコペルニクスは一新星を發見したのである、渠は地球を天空の中に置換へたのである。アリストテレスによつて敎へられ、中世の人々によつて信ぜられた古い天地反對說、天上及び地上物理學は忽ちにして消滅したのである。「月が地球の天に屬することが地球が月の天に屬すると異らざる如く、吾々が月を仰ぐ如く月の住民は地球を仰いでゐる」。感覺世界の統一が人間の心眼の前で達せられた、其の統一の第一の科學的證明が齎らされた。而かも此の理論的結果と雖尙ほ新學說の全意義を盡くしたものではないっ同時に世界に對する統一的觀察と共に、內面から人間に一切の有に對する同情が起きぬばならぬ。

「此れは感官を開發し、精神を解放し、悟性を尊崇し、安逸を求める慘憺たる心勞と、苦痛を脫しやうとする盲目的畏怖とより人間を解放して、人間として達し得る眞正の幸福を指示する哲學である」。

此れはジョルダノー・ブルノーの言葉である。かくブルノーは新說を捉へた、否かく新說に捉へられた。新世界觀の此の殉死者は近世科學の豫言者たる新哲學の先頭に立つてゐる。勿論其哲學的思索よりすれば渠は尙文藝復興期に屬してゐる、精確に云へば文藝復興期本來の哲學たる新プラトン派の思想に屬してゐる、又或る程度迄は迷信的な秘學的な「科學」に對する當時の傾向を分享してゐる。併し宇宙論上の見解に於ては確に創見を有して居り、實在と眞理とに對する先天的觀念によつて指導せられた。渠はコペルニクス說を總括した。渠は廣大無邊な蒼穹の裡に無數の太陽が輝いてゐるのを見た、唯距離が遠う過ぎて大さが小さ過ぎ

る爲に見えないところの各游星、即ち渠が用いた意味深遠な語を藉れば各「地球」を見た。渠は此の太陽系に於て古來發見せられたよりも多くの游星がある事を斷言した。只今日多衆の者にとつて知識の對象たるものが、ブルノーにとつては熱烈な感觸、宗教的の氣分、感情の對象であつた。渠は星學の哲學者であつた。そして吾々は如何にして科學的眞理が哲學的眞理に變るかを見たい。—ブルノーの偉大な例によつて、科學的眞理が人間の全本性と一致し契合し、單に悟性のみに嚮はずして全情意生活によつて理解せられるときは、哲學的眞理に變化するものであることを認めたい。

既に僧院に於て(當時僧院は尙ほ科學講究の本場であつた)ブルノーはドミニカン派の新發知として年少早く業にコペルニクス說に通じた。同時に渠の精神は桎梏を脫し、牢獄の壁のやうに中世紀の世界をとり圍んでゐた欺妄の圈域から解放せられたやうに感じた。寺院の水晶のやうな天蓋や、頭上の圓天井は消滅してしまつて、「渠れの眼に赫々たる光輝を發するものは只世界の美のみである」とコペルニクスを頌する詩に言つて居る。ブルノーの考は「勝ち誇れる野獸を追放」して天體を改良すると云ふ更に一層博大にして大膽なる類推に進んだ。即ち若し宇宙間到るところ同一の物質的自然が存在し、到るところ同一の勢力が活(はたら)いてゐるとすれば、到るところ有機的生活が今後發展の域に到達するに違ひない、否既に到達してゐるのではあるまいか。

燦爛たる天上の星を眺めよ。——否星に非ずして凡て之れ世界である。——そして此のあらゆる星は地上の生活と均しい否一層高尙な超人生活を營んでゐることを知れよ、否あらゆる星は自(みづか)ら一個の生活體、光輝ある有機體たることを知れよ。——此れはブルノーの無數星辰世界說である。此の學說はとりもなほさず中世紀

の世界觀を瓦解した。蓋し中世紀の世界觀は此の世界以外に有機生活があると云ふこと、否あり得ると云ふことの爲に既に崩壞した。太陽中心地動說は敎權的カトリック敎の信條を危險ならしめるものとすれば、人が住んでゐる世界が多數あると云ふ說は、文字通りに解釋せられた基督敎義一般と調和融通の途がなかつた、又ない、從つてブルノーの最後は悲劇に了はつた。

啻に物理界のみならず、精神界も亦同一要素同一法則に依存する。全自然界の發展が主として同種であると假定せられる如く、又有機界が同一若しくは類似の法則から支配せられる如く、精神界の法則も亦同一若しくは類似の種類でなければならぬ。精神界の法則と有機界の法則とは性質上區別すべきでない。ブルノーの哲學に於ては精神界の觀察を侈して宇宙萬有に應用した。道德的法則は一般精神的自然法則であつて人間の任意法ではない。道德的價値は一般妥當であつて純粹な人間的價値ではない。此見解を以てブルノーは倫理學の人性論的制限を打破した。而して此れは根本的本質上新說であつて、又實際從來耳を傾けるものがなかつた、唯プラトーが同樣の卓越せる觀察に到達して居つた、そして其の後再びカントの純粹理性の道德に於て始めて同一の博大なる一般化の傾向に遭遇する。

コペルニクスは世界の中心を置換へた、そして啻に游星系統の大陽中心說たるのみならず、渠の學說は本來太陽中心說である。ブルノーは宇宙には絕對的の位置はない、各星宿は均しく世界の中心であると云ふことを識つてゐた。渠の學說は宇宙中心說である、否神中心說である。「吾々は天の中にある、天は吾々の中にある」と渠は叫ぶのである。吾々はどんなところに居らうとも常に吾々の中心に居る、卽ち神性に接近する、否吾々が吾々自身に內面的に現存するよりも一層內面的に神性が現存して居る。神は萬有の本體、自然そのものである。創造的自然は萬物

の神である、即ち「自然は事物の中に存する神である」。讃美歌に似た言葉を以てブルノーは神と自然とが一體であることを稱へた。

「吾々は不變不動の自然法の裡に、自然法を憧憬する敬虔な氣分の裡に神を求める。吾々は太陽の赫耀たる光輝の裡に、母たる土地の嗽芽から綻びて燦爛たる本性を發揮してゐる萬物の美の裡に、廣大無邊の天邊に輝き、活き、感じ思惟する無數の星辰の瞬きの裡に、渾一最高を讃美する最善の裡に神を求める。」

斯くの如き考へ、斯くの如き感じを吾々は汎神論と稱する。此れは多くの賢明な精神が分有した感じと考へである。ゲーテも亦ブルノーの「神即自然」の信仰に通曉してゐた。

ブルノーは自ら稱して「無限を崇敬する者」と言つた。世界の無限と云ふことは渠の哲學の根本見解、主要觀念である。有限な世界は神が創造することが出來るだらう、無限な世界に對しては神は單に其の作用的原因たる位地を占める、而して原因が結果の中に含まるゝ限り原因と結果とは同一なるが如く神と世界とは同一である、故に神は世界と自然とに內面的に働く原理であつて又結果を支配する原理である。外面的時間、空間的有限の宇宙はその中に活いて居る指導的創造力てふ內面的無限即ち神の活動力の摸像として現に存在してゐるやうに現はれる。世界は神の啓示にして神の本質と分離すべきでない。

ブルノーが自分の形而上學的思索を發表したかくの如き思想と、かくの如き熱情とが渠の形而上學的思索の行途を照らした、吾々は復スピノザに於て同一思想に遭遇する、只言ひ表はし方が更に一層抽象的である。ブルノーは感情に充ちた詩趣ある言辭を以て述べたに反し、スピノザは哲學的信條に對して「幾何學的」證明を試みた。又ブルノーは一般の統一中に個人的存在を滅却しなかつた。世界の實在

を無數の森羅萬象に顯現する唯一の創造力は、各個人に於ても亦均しく無限に發展し行く源泉である。斯く解して此創造力を單子（モナード）と稱した。――「何ものも無に變ぜず、一切は一切に變ず、吾々自身及び萬物は生滅來往す、吾々と同一となる事物は一つも存在せぬ、又吾々と異つたもので吾々自身とならぬものは一つも存在せぬ」。實有や本質が統一してゐるからと云つて、それが多數となり且つ發展することは否定することが出來ない。

ブルノーの宇宙論卽ち渠の精神が始めて認めた世界の姿は殆ど漸次科學によつて承認せられた。ブルノーの哲學は意識的に若しくは無意識的に近代の凡（おほ）ゆる一層廣汎な獨斷的哲學が養はれた內面的生活である。此新世界の看察者並に新時代の使徒の精神的偉大は尙ほ此れを以て盡きない。千六百年の二月十七日羅馬のカムポデキフオレに於ける焚刑の思ひ出は眞理の爲には死をだに顧みない模範として、又その打克つべからざる證據として千古歷史を照らすであらう。

眞の世界系統如何といふ問題は近世科學の發展の中心問題として、暫くの間正に科學一般の問題となつた。ガリレオが記して言ふ、コペルニクスを禁ずるは卽ち科學そのものを禁ずるものであると。

ガリレオも亦新しい眞理の爲めに迫害を受けた、眞理の爲めの追窮や幽囚を忍んだ。吾々は一般哲學的意義を有する各科學的眞理が古來奮鬪の結果僅に獲得せられたことや、犧牲を拂つたが其の犧牲は徒爾でなかつたことを決して忘れてはならぬ。恐らくこのことは科學の全價値を深刻に意識する爲に必要であらう。吾々はガリレオを自然科學の本來の創始者として稱讃する。蓋し渠は自然科學にその方法を與へたからである。吾々は渠を重力の法則の發見者、而して此の發見と共に、力學卽ち運動の科學の基礎を措いて、「全物理學に對する最初の門戶を

開いた」者として稱讃する。吾々は渠の星學上の觀察、就中木星の衞星、即ち小規模のコペルニクス流の世界の發見を驚嘆する。渠自身はコペルニクス說即ち眞相の認識の爲に生き又迫害を受けた。渠は言ふ、「玆に眞理あり、此の眞理たるや、唯一眞正のものにして變更すべからざる必然のものとして存在する」と。ガリレオの新世界觀の爲の奮鬪、外面的敗北、內面的捷利は人間精神の解放の歷史にとつて多くの點に於て偉大な意義を有し、永久忘るべからざるものである。最早渠は羅馬が虐待する僧院を遁れた僧侶ではなくして、盛名赫々たる一人物、世界から尊敬せられ、宮廷から最高の待遇を受ける科學界の王侯となつた。齡高く世の崇敬をあつめつゝも、最早病氣の爲如何ともすることが出來ないほど衰弱したとき、羅馬は渠の宣言を撤回することを强要した。併し眞理と眞理の力とは矢張克服することが出來ない。詮ずるところ修辭法と雄辯術に過ぎないかの單に教理的、表面的な教義と、其の理論は證明することができ、その意見は自分の勝手や他人の命令で變ずることができない全然精確な諸科學との間には打克つべからざる區別があるとガリレオは斷言する。「何となれば科學を眞なものとしたり、僞のものとしたり、又は自然であり事實であるより以外のものとすることは如何なる人間の力にも又は人間制度の中にも存在してゐないからである」。此れよりも一層高慢にして權威ある言葉は未だ嘗て科學的眞理と其の權威について言はれたことがない。

ガリレオの方法即ち歸納と演繹、經驗と思惟とを結合する實驗的方法はカントが高調したやうに科學的思惟の革命である。此の方法は古代の自然哲學を永久に近代の自然哲學即ち自然科學に變化した。古代科學と近代科學との全反對、前者より後者に至る進步の擴がりは數語を以て掩ふことが出來る。即ち何故に物體は落下

するか、如何なる種類の內面的衝動に依て刺戟せられるか、如何なる秘密な原因から刺衝せられるかと問ふ代りに、ガリレオは如何にして物體は落下するか、如何なる形に於て、如何なる法則に從つて落下するかと問ふ。科學的問題提出上の此外觀上甚だ瑣細な變化が實に人智の二期を劃するのである。此變化は原因の本質に關する無益にして賴みにならぬ研究の代りに、只原因の法則の討究並に考察と云ふ解答し得べき問題を置いた。此れは原因の本體は到底究明することが出來ないと云ふ諦めからではなくして、人智の本性を洞察した結果、かゝる空想は棄てねばならぬと云ふことを知つた爲である。「物自體」の本質を洞察することは吾々精神の能力如何にある。若しも吾々自らが此の本性によつて支へられてゐるならば、吾々自身の存在の此の本性をば假定しなければならぬ。然らば如何にして吾々は吾々の思惟によつて此の本性を摑むべきか、如何にして吾々の有する概念の範圍內に於て正しくこれを摑むことが出來るであらうか。ガリレオは大膽にも人間の理解力を以て自然界を活かすものの基準とする先鋒として現はれた。蓋し自然界の如何につまらぬ働きでも、一つとして此れを完全に認識することは、如何に明晰な頭腦でも能くするところでない。併し科學に措かれたる、否若しも科學が自らを理解するならば科學自らが措くところの限界に於ては、知識は絕對的即ち完全であつて相對的ではない、即ち必然性を洞察する。唯此の限界を超えては何事をも識ることは出來ない。此の限界外の研究は更に何等の意義もない。唯原因の法則を知れば其の結果を推知することが出來る、そして實際的にも理論的にも自然の力を支配することが出來る。

ガリレオ說は引續き發展してニュートンに至つた。蓋し一度その途が發見せられる時は科學研究の進步はそれによつて直接に解決せられる。ケプレルがその世

紀の初期に當つて游星の軌道に關する研究と計算とによつて數學的星學に終結を告げた同一世紀の末期に、ニュートンの事業たる物理學的星學が建設せられた。併し此建設を可能ならしめる爲には、其中間にガリレオが力學を創設し、ガリレオの有名な後繼者たるフヰゲンがその力學を完成するを要した。蓋し天上の事物の落下が一般の重力の法則によつて支配せられるに先つて、先づ地上の物體の落下の法則が與へられねばならぬ。ニュートンの引力說は游星軌道に關するケプレルの法則を、ガリレオの重力說とフヰゲンの圓運動の法則とを藉りて解釋した者に外ならぬ。玆に科學の最古の信仰卽ち宇宙の規則正しいことは解釋せられた。古代の哲學が絕えず苦んだ問題が解釋せられた、而かも嚴肅な形に於て解釋せられた。蓋し嚴肅は簡單を意味する。今や簡單な數學的形式の唯一の法則は世界の統一に加ふるに計量を以てし、同時に有らゆる天體の運動を支配するに至つた。此の唯一の法則から有らゆる天體の宇宙に於ける過去と將來の位置を計算することが出來る。

吾々は獨立實證科學の出現が哲學に對して如何なる意義を有するかを知つてゐる。科學に對する此の關係が延いて哲學の性質を決定し、又此の關係によつて獨り適當に哲學の近世史の時期を區劃する。

始め哲學は科學に屬してゐた。哲學は科學と同一であつて唯科學の研究を窮はめ之れを完成せんとするものであつた。哲學上の問題として別に新しいものがあるのではない、唯科學の問題に新しい數學的力學的考察を加へて、之れを廣汎な見地から解釋するのである。故に哲學は一般力學である。以上は十七世紀の大體系の時代であり、此の時代の代表者はデカルトである。ロックが始めた第二期に於て哲學は特別な研究範圍を見出した。此の時期の哲學の對象は哲學を特殊科

學となし、特殊科學の嚴密と精確とを得せしめると同時に、一切の科學に同一の方法で關係し、且つ一切の科學が之れを取扱ふと云ふ點で哲學を依然として一般科學たらしめる種類のものである。此の研究領域は卽ち認識そのものであり、その對象は知識の概念、系統ある經驗であつて多數各個の經驗ではない。哲學は科學たる限り知識論(Wissenschaftslehre)である、知識の檢覈、理性の自己認識である。斯かる哲學は事物の表象(吾々の)の眞僞を論ずるので、事物の本性を論ずるのではない、そしてその對象たる科學を假定する。然らば如何にして哲學は科學に代らんとするか。

哲學の此の最も妥當な時期と前世紀の六十年(千八百六十年)の革新との間に挿入し來つたものは、純粹科學的見地から判斷するならば何等の進步でもない、寧ろ發展を阻害した。卽ち獨逸の所謂「唯心論」は再度研究と批判とに對して思辨を輸入し、科學は單に跳梁すべからざるのみならず、思辨に讓らねばならぬと考へられた。哲學は經驗を要しないと自負したのは此の派の哲學である。フヰヒテは哲學者はその攻究を進めると言つた。斯くの如く經驗を全く蔑視したことはフヰヒテの學說の實踐的方面に於ては幾分恕し得るとしても、その理論的研究をして誤謬空想に陷るを免れしめなかつた。シェリングはニュートンの自然科學を以て「無觀念(イデンロース)」と云つたが、科學は又シェリングの觀念多き自然哲學を「無意義(ジンロース)」と斷じた。吾々は兩者を了解することが出來ない。蓋し一方に於ては「觀念」卽ち價値概念を本來價値概念の存在しないところに求むると同時に、他方に於ては好んで觀念の價値を一般に否定しようとする者であるからである。斯くして其の全哲學は之れを科學として見る限りは大なる誤解を生ずる。從つてフヰヒテ哲學は獨逸國民の指導者を以

て自ら任じた渠の本來の企圖たる倫理中心的傾向を樹立することが出來なかつた。

哲學がその近世發展の第一期に於て、如何にして科學と結合したかは、近世哲學の大體系の歴史が之れを示すであらう。

デカルトと同時代で而かも之れが好敵手にして、政事上の最初の精確な思想家たるホッブスは、コペルニクスを以て近世哲學の始祖とし、ガリレオと及び血液循環の發見者たるハルヴェーを以てその基礎を措いた者とした。斯くの如くホッブスは近世哲學を近世自然科學の意味に解した。此れは次ぎの説明から當然出で來る結果である、曰く哲學は既知の原因即ち生源からその結果即ち現象に對する一定の認識であつて、同時に又既知の結果からその原因に對する眞實(まこと)らしい認識であると。此の説明は科學的研究の二重の方法を含む者であつて、その前部は内的直觀によりてその原理が與へられる數學に關係し、その後部は現象が與へられる原理即ち原因を求むる經驗的科學の總體を包括する。故に數學と自然科學とはホッブスにとつては哲學を構成するのである。ホッブス曰く哲學の對象は各物體なりと。玆に所謂物體と云ふ語は甚だ廣い意味に解せねばならぬ。即ち結合せるものにして其の起源を有するものを凡て意味し、就中吾々自ら作出(つくりだ)す原理に從つて結合せるものを意味する。例へば幾何學的物體とか、人間の意志によつて作られ、約束と法則とによつて作られた政治的團體即ち國家と云ふやうなものである。故にホッブスは國家等を演繹的數學的觀察の下に排序した。此れは特に國家に就いて先天的に認識し得る事柄を其の歴史的事情から抽象せんとする考から出たのである。而して哲學を物體學(ケルペルレーレ)と解し、一般認識問題を包括する自然科學に歸した。又一方ホッブスに於て既に哲學を以て認識批判とする考の萠芽を見出すことが出來る。その空間説に於て渠は實にカントの先驅者である。

デカルトの哲學は十八世紀に於ては遵奉者も反對者も共に之れを物理學と解せぬ者はなかつた。殊に其の有名な旋渦運動說は星學上の觀察と撞着する故を以てニユートン說と相容れないけれども、重量を物理學的に說明せんとする試みとして歷史的に特に注意すべき者である。且つデカルト自らも普通世人が渠の哲學と解する形而上學的觀察を最高位に措かずして却つてその物理學的研究を最高とし、此の物理學的研究に對して客觀的妥當性を要求した。之れに反して形而上學的思辨は單に渠の嗜好と合する者であり、世人も亦同一の嗜好を有するだらうが、物理學的研究の方が一層世人の趣味を喚起するに違ひないと考へた。渠は物理學上二三の一般學說に通じたとき最早無名にして了はるものでないと考へた。蓋し物理學は渠をして理論的學校哲學よりも吾々をして自然の君主、所有主たらしめる實用哲學を得る方が生活上有効であると云ふ見解を懷かしめたのであらう。デカルトは力學の原理を一切の外界過程に應用せんとし、又光線屈折法則の物理學的說明を創めることに思を潛め、又遠心力と旋渦運動の壓迫から重力を導かんとし、殊に當時流行の生理現象の機械觀に就いて考慮を廻らした。又デカルトは物理學、形而上學と均しく生理學、醫術を革新した。實に渠は機械學派と稱する醫學派の先頭に位して居る。蓋し此の派は生理現象を器械的見地から研究して病氣治療の手段を講じやうとする學派である。デカルトが整序した生理學的知識は當時驚くべき精確のものであつた。渠は解剖學的觀察を試み、——解剖した動物を時に圖書室と稱した、——動物試驗を始め、有機體の發達史を研究し、又反射運動を人間や動物に就いて檢し、熱が動物運動の唯一の根源であることを知つた。斯くの如く生理學的研究に最も重きを措き、之れを醫術に應用することが渠の「哲學」の本來の目的であるが如き觀があつた。渠は千六百三十七年に記して、全餘

生を自己新發見の方法による自然の研究に捧げて、醫術に對し從前よりも一層精確な法則を發見せんとすと結語した。

デカルトが第一流の自然科學者であると云ふことを識らぬ者と雖、渠の著書の日錄を一見するときは直に首肯するであらう。方法にして議論に非ず、講學の指針にして兼ねて人間を學び得べしとクーノー・フィッシャーが評したデカルトの「講演」に關する記錄は物理學的及び數學的內容の研究系統の入門を形つてゐるが、デカルトは之れを普通の書名「哲學的研究」と題して公刊した。光線屈折論、氣象論、幾何學卽ち之れである。——而して此等一切の研究を共に稱して哲學的と言つた。研究的科學と理論的哲學とは渠に於て全く同じことを意味したこと、換言すれば當時の人々と同じく兩者を全く同列に置いたことに就いて此の上廣い證明を求むる必要はない。

所謂「哲學的研究」と云ふ名稱が旣に表はす如く、デカルトが「哲學的」と云ふ言葉の狹義の意味以上に、物理學的數學的研究に重きを措いたことは「哲學の原理」と云ふ名稱とよく一致するものである。蓋し「哲學の原理」と云ふデカルトの主著はガリレオの論斷から受けた印象の下に復歸した舊著の敷衍であつて「世界」と云ふ題目を有すべきである。渠の四書の中三書は自然科學的問題を論じたものであつて、その中に全學說、卽ち渠の物理學の系統を述べた。その主要なる思想は物體の機械的發展であつた。「物質は運動法則の助けによりて漸次各自適當なる形相を採るものにして、此の形相を一個の系列に從つて見るときは、結局現今の世界の形相に到達するであらう」。從つて自然過程は運動の切れ目のない完全な連鎖であつて、その連鎖に於て運動の總體は變化しないものと假定せられるのである。——此れは尙不完全ではあるがエネルギー不滅の原理を始めて言ひ表はした

ものである。而してデカルトは力の概念を潜在的質量と潜在的運動の概念に變化したが故に、今日ヘルツが再び踏んだ途と同一の途を既に履んだものと云つてよい。旋渦運動說卽ち自轉運動說は現代の物理學に於て復活した。

デカルトの精神は其の「哲學の原理」に於て宇宙を隈なく通覽した。運動の一般法則より出して天體物理の觀察に進み、次ぎに地上の物理學に下り、次ぎに神經腦髓の感覺を伴ふ運動に移り、玆にその觀察、その主要なる經驗が盡きた。何となればその次は一切の經驗の出發點に復歸するからである。デカルトによれば感覺は發展しない安靜でなければならぬ。——デユ・ボア・レイモン其の他事物の器械的現象を以て事物の本質とする自然研究家にとつても亦然らざるを得ない。デカルトが感覺を如何に解したか又解せねばならぬかを見るのは甚だ有益なることである。元來渠の哲學の根本原理によれば吾々以外の實在の認識の要素たる感覺は全然存在しない筈である。純粹思惟より成立する精神からして感覺を導くことは出來ない、又結局外延と運動に外ならない物體より感覺の意義を解することは出來ない。故にデカルトは感覺を物體と精神との結合より導いた。然れども二個の要素の結合より、その何れにも含まれない生果が如何にして生ずべきかは全然不可解である、而かも此の二要素は其の本質上互に矛盾し排斥するものたるにおておや。

デカルトの形而上學と認識論とに對する根本的觀察は又渠の物理學的研究と密接に關係してゐる。斯く科學的研究と關係して居る爲に渠の哲學上の觀察が確實なのである。斯くして殊に有名にして而かも屢々誤解せられた「われ思ふ、故にわれ存す」(cogito, ergo sum)と云ふ命題を得た。デカルトは此の命題を以て主觀より出發して一定の方法を履んで進み、完全なる演繹の方法によつて知識の根本概念、實有の根元に到達せんために、一切の前提、自然科學的認識の前提卽ち

思惟的主觀に復歸しやうとする。渠の說によれば思惟の存在は唯一の直接に確實なるものである。茲に於て吾々はアルキメデス風の思想を想起せねばならぬ。茲に一個の元理があつて此の元理の中に眞理と現實とが一致する、但しその元理は自ら自己の中に存在を有し、同時に理解し得べきもの、否理解そのものでなければならぬ。「思惟は事物の眞理の規矩である」。思惟によつて各認識に對して眞實にして同時に現實なる標準が與へられねばならぬ、特に科學的認識はこの標準によつてその證認を求めねばならぬ。デカルトがその形而上學的考察と共に求めた唯一最高の目的は、物理學がその假說を作るところの概念の實在を證明するにあつた。デカルト謂へらく理解せられ得べきものゝみが現實である、數學的原理のみが外界自然に就いて理解せられる、故に數學的元理のみが本來現實である。自然は數學的に働くが故に規則的であり、從つて之を明瞭明晰に認識することが出來る、故に現實であると。デカルトのこの推論に於て概念に關する中世(及古代)の「實在論」の餘影を容易に認めることが出來やう。デカルトの自由精神にして尙且つ全くは此の實在論より脫することが出來なかつた。中世の實在論は普通、概念性を事物の認識とした代りにデカルトは概念性を事物の現實性の標準とした。デカルトにとつては唯理的は又實在的である。事物は理窟に合へば同時にその範圍に於て實在する。茲に於てデカルトの考によれば此の感覺世界はその無數の性質と及びその諸種の段階と共に純粹に數學的客觀に變ずるのである。デカルトは此の客觀が渠特有の抽象の殘滓を表はすに外ならぬことを知らなかつた。且つ此れを抽象と解するによつて自己の學說の正當なる所以を解しなかつた。概念を區別する代りに事物を區別し、斯くして渠の所謂二個の「實體」の對立を生じた。純粹思惟的實體と單純な外延的實體と卽ち此れである。此の抽象の裡に全具象的自

然は倒壞して仕舞つた。されどデカルトの「二元論」は精確な研究の見地から盛に採用せられ、均しくデカルトが發見した近世科學の精神によつて徹底せられた。併しガリレオに對するデカルトの反對を看過してはならぬ。ガリレオは自然過程の數學的法則を研究したのに反し、デカルトは自然過程を直觀的にする模像即ちモデルを模擬したのである。故にデカルトはガリレオの間違のない遣方を正當に理解することが出來なかつたのみならず、ガリレオは未だ重力の本性を決定しない前に重力の法則を決定したのであつて、それは只重方の物理的法則であると言つてガリレオを批難した。故にデカルトはその國人から「物理學の父」と稱讃せられるけれど、寧ろガリレオが一層正當に此の尊稱に値する、殊に他の意味に於て確に此の尊稱に値する。換言すればガリレオは法則の物理學を創め、デカルトは假說の物理學の近世の例を始めて與へたのである。

第十七世紀の大哲學體系中の形而上學者はスピノザである。渠の思想の外裝たる證明の「幾何學的順序」が示す如く、當時の數學的力學的科學に對する趨向が渠の哲學體系にも亦影響を與へない筈がない。渠の哲學史上の位置は一切の現象の必然性に對する新見解と、人間精神の最高の要求と靈感とを結合したのみならず、此の新見解を以て神に對する眞正の認識の基礎、精神解放の根源とした點にある。渠の此の學說の構成に資したものは就中新プラトン派の見解であつた。スピノザの精神が著しくゲーテに影響し、その全思想の傾向を支配したことは世人の普く知るところである。ハイネは此れに就いて興味ある言をなした、曰く「スピノザの學說は其の數學的覆面から脫繭してゲーテの詩となつて吾々のまわりを翱翔する」と。スピノザのエチカから駘蕩たる和風がゲーテを吹くと見えて玆にゲーテの炎々たる情火を鎭め、肉と靈とに對して偉大自由なる見解を把持するを

得せしめたと云へやう。

吾々はスピノザの學說を卓拔したる哲學的世界觀の中に數へる。恰もプラトー說が世界や人生の意義を以て歷史的意義を超越するものとする世界觀人生觀の模範と考へられる如く、吾々はスピノザ說を以て沒人格的であつて本體を歷史的事物以上に置くものと考へる。又かく考ふべき特別の理由がある。蓋しゲーテが高調するやうに此の哲學者の沒我性卽ち「無限の非利己性」は渠が殘した學說を渠の名で呼ぶことを許さなかつた。渠によつて渠の著書を作つたのは渠ではなくして神の思惟能力であると考へた。唯渠の署名によつて「ヱチカ」は世に現はれた、而かもその署名も渠の意志に出でたのではない。

スピノザの主要の概念は自然法則の概念である。自然の規則正しいとから類推して個物は無限の神的存在に依憑すると考へた。「神は其本性の法則に從つて行動する」。而して神のみ獨り自ら現實であつて神の外に「實體」なく、又實體を理解することが出來ない、故に神の本性の法則は一般自然の法則である。神は自然自體である(deus sive natura)。故に神は自然法則の中に自己を啓示する。自然法則は神の本性を認識すべき形式である。蓋し自然は無限に擴充する、換言すれば自然は現に通用し、既に通用した、又通用するであらう總ての無數の場合に擴充するからである。又自然は不變と變化に於て時間から獨立する一切を表はす、而して自然が嘗てあつたもの、及び永久あるであらうものと現に異らぬ限り、自然は「或る永久の形」の裡に考へられるであらう。「斯くして自然は自ら吾々に一定の方法に於て神の無限、永久、恒常を示すであらう」。實にスピノザは普通の吾々の認識と違つた一層高尙な認識の存在することを知つてゐた。此の點に於て渠は一個の神祕家である。渠は理性直觀、卽ち一切の事物が永久に神の本性に包容せられ且つ根柢を置かれる

と共に、人間が直接に自己を自覺することを信じてゐた。此れは直觀と稱する「第三の認識法」であつて、甚しく自負自贊の而かも未だ嘗て明にせられず、將來も明にすることが出來ない說である。渠は常に哲學者として語り、單に思想家として語つて、決して神祕家として語らなかつた。その明かに云ふところによれば、如何なる事物の本性でも知ることが出來る一方法がある、即ち自然の一般法則、規矩によることである」。「蓋し自然は常に同一であり、その力と能力とを運用する方法は常に同一である、即ち自然の法則、規矩に由るのである。此の法則規矩に適應して一切の事物は生起し、或る形から他の形に變化するけれども、自然の力と能力とは至る處常に同一である」。此の自然法則による認識法をスピノザは理智（ラチオ）と言つた。此れは當時數學的自然科學、從つて純理的自然科學の方法に於て數學の例に從つて認識と云ふ程の意味であつた。「三角形の概念から無窮より無窮に至る迄三角形の三角の和は常に二直角であると云ふことが抽出される如く、神の無窮の本質から無數の多くのものが無數の方法で續出する、即ち萬物が續出する」。事物の全體は唯一最高の存在即ち神の特殊化即ち觸發に外ならぬ。此の無窮にして全然活動的な本體即ち神の「根本的活動」（acutuos essentia）は不斷の創造作用であつて、又その創造物の順序は確定不變である、換言すれば少しも自然法則を增減することは出來ない。「事物は現に神によつて作られたと違つた方法で、他の違つた順序に作られることは出來ない」。若し自然の順序が現在と違つた他の順序であることが出來るとすれば、神も亦現在と違つた他物たることが出來ねばならぬ。一言にして掩へば他の自然と他の神とがあることが出來るであらう。現存する自然の順序の外に第二の自然の順序が可能であることを許すとしたならば、神の本性を二重にし、二個の神を信ずるものである。故に斯くの如き假定は自ら矛盾

し、且つ唯一神の本性と存在とに對する眞正の信仰の異端である。故にスピノザによれば神の統一とその唯一とは自然の統一とその唯一とである。自然法則が依つて以て通用するところの數學的必然性は事物の本性の目的と偶然とを容れない。自然は事前的目的を有しない、又內的目的の爲に動作しない。卽ち目的觀は自然過程の根柢までは達しない。換言すれば目的觀は皮相な相對的な純粹人間的な觀察法であつて、人間の想像力の創造である。從つてその自然は人間の衝動と欲望とを其の原因とする自然である。「神は自然を支配する、而かも自然の一般法則は必要であるが、人間的自然の特殊法則は必要でない」。偶然は吾々の知識の足りないことを意味するに外ならぬ。蓋し原因を認識し得ない事物は吾々に偶然と見える、同一理由からして意志は吾々に自由と見える。併し事物そのものの本性中には決して偶然的のものは存在しない(in rerum natura nullum datur contingens)、却つて萬物は神的自然の必然性から一定の方法に於て存在し、又作用するやうに規定せられて居る。一定に作用するやうに神によつて規定せられぬ事物は、一として自ら作用するやうに自ら規定することは出來ない。神によつて作用するやうに規定せられてゐる事物は、一として自ら不定たることは出來ない。

此學說はスピノザに於ては純粹科學的ならぬ「目的」を持つてゐる。故に吾々は此れを人生指導に屬する他の意義であると云ひたい。此の學說は精神を强固にし、人間の力を自己及び事物以上たらしめる手引である。此の學說は自由論である、詳しくは行動の內的必然性と撞着せざるのみならず、寧ろ之を前提とする眞の自由の途上に人間があることを敎へるのである。此の學說は最高善に關する學說である。故に物理學とも形而上學とも稱しないで倫理學と稱したのである。

「人間自身が作用的原因たる限り、人間自身の本性の單純な法則によつて理解

し得べく、之のみが必然的に善である。而して人間は全自然の一部であつて人間的自然は全自然の法則に服從せねばならぬ、又人間は殆ど無限の方法に於て自然に適應せねばならぬとすれば、外的原因よりするに非ずんば如何なる災殃も人間に到來することはない」。感情は人間の行動を束縛するものであり、惡とは情熱たる激烈な感情によつて人間精神を强いて抑壓することであると言ふことが出來る。若し人間にして生得的に自由であるならば、始めからその特有の本質の爲に動かされて、情熱によつて刺衝せられることはない、從つて善惡の概念を構成することなく、確に「善惡の彼岸」にあるだらう。故に必然的善は絶對的力である。即ち德と力とは同一である。換言すれば全然自己特有の力から行動するのが善である。故に幸福は德の報酬ではなくして德自身の力である。斯くスピノザは敎へた。スピノザの學說は運命の二重の相貌卽ち幸と不幸とを平氣で忍耐し、而かも諦らめて忍耐するのではなくして、之を首肯し、之と合致しつゝ忍耐すべきことを示すのである。蓋し至るところ神の威力と能力が活いてゐる。吾々は最高萬能の存在の指命によつてのみ行動し、此の至上存在の中に生き動き存在する。——此れがスピノザの人生觀の要訣である。

吾々が知るところの獨斷的哲學の最も完全な模範として、卽ち未だ批評哲學に遭遇せず、又は此れを忘却したるときはスピノザの「エチカ」が最も有力な影響を與ふべきことは怪しむを須ゐない。歷史が證明するやうに獨逸の觀念論的思辨の父はカントでなくしてスピノザである。獨逸觀念論的思辨の主要なる思想はスピノザ流の思想の模倣である、否往々にしてその冒瀆である。

此の觀察の終に於て第十七世紀の大哲學體系(ライブニッツも亦之れに屬する)の眞の價値如何と云ふ問題を考へやう。換言すれば一般に哲學體系建設の價値を

尋ねやう。若し此等の大思想家の事業にして、研究の方法が指示し、その方向が歸向し、覺醒し、革新する究竟目的の性質を明かに意識せしめるに過ぎないとするも、その効績たるや決して零碎ではない、否之れによりて單に實證的研究を以てしては補充すべからざる結果を得るだらう。デカルト曰く、一切の科學は總て人間的認識に外ならぬ、而して人間的認識は如何に異種の對象に應用せられても常に同一である。故に太陽の光はその照らす事物が如何に違つても常に同一であると。併し科學的認識から出發し、而かもその限界を超越した討究の中で最も價値あるもの、哲學體系は交替し、その見解は發展するに拘らず、今日現存してゐるものが示すところは、その體系の發見したもの、詳しくは假僞の業績ではなくして研究そのものである、詳しく言へば事物と人生との全意義を理解せんとする努力、尙充分に世界に於ける吾々の位置を洞觀せんとする努力、尙深く且つ直截に吾々の全本體を摑み、吾々の意見を高尙にし、吾々の行動を指導すべき努力である。——之れを一言にして言へば眞理に變化し得る一個の認識を求めんとする努力である。

第三講　批評哲學

カントの先行者の謂ゆる批評哲學は近世科學及びその徑路を蹈襲する哲學體系のやうには華々しく哲學史に這入つて來なかつた。批評哲學が感官及び想像力を掴むべき問題は一致しなかつた。批評哲學は人生と現實とに沒交渉のやうに現はれた。此の哲學は吾々を廣大な宇宙に導かんともせず、又自然の本質を洞見する秘鑰を授けやうともしない。觀察を認識主觀に向け、事物の討究は之れを科學に委して、自らは事物を理解せんとする悟性を研究した。吾々の認識の內容を豐富にせずして、認識そのものの形式と價値とを規定しようとする。從つて又本來討究的でなくして評價的である、卽ち批評的である。經驗の範圍を超越する問題に對するソクラテス風の不知の智は批評哲學の格言である。批評哲學は知識を形而上學

的概念の混同より拂淨し、知識の圈域から斯かる餘分の概念を排拒しようとする。而してソクラテスによれば不知を識ることが個人の自覺の第一歩である如く、批評哲學は一般理性の自覺の第一歩の而かも截然たる第一歩である。

認識を認識しようとする！此のことは矛盾ではないか、此の企圖は自己矛盾ではないか。吾々の悟性を研究し得るためには他の一層高等な悟性を假定せねばならぬ。然らずんば悟性は自己の事件に就いて同時に一方では裁判官となり他方では被告とならねばならぬ。ロックは言ふ、悟性は眼のやうで、他物を見るけれど自分を見ることは出來ない、故に悟性そのものを前に措いて悟性の研究の對象とせんが爲には特別の技術と勞力とを要すると。然れども眼と雖鏡面に現はれる自己の映像を看るならば自己を見ることが出來る。そして悟性の鏡は悟性の產物、卽ち人間の知識と科學とである。玆に內面的機能たる悟性が發現し、悟性の作用

する結果に於て自己の機能を認識することが出來る。併し根本的の考は譬喩を以て取扱はれるべきでない。認識そのものの批評と云ふ仕事に於て、如何にして此の批評が可能であるか、その批評は如何なるものでなければならぬか、その批評は如何なることをなし得るかを示さねばならぬ。

吾々は玆に吾々一般に普通である通常の直觀から出發する、即ち感官知覺に於ける客觀の直接の現存と云ふ意識から出發する。此の感官的意識は經驗の始であるが知覺と對象とを區別せず、唯だ對象を知るのみであつて對象の知覺については少しも知らぬ。感官の直觀は外に向つて吾々自身には向かない。吾々は太陽の出沒するのを見るけれども、吾々が地球と共に運動するから、地球の運動を感じないと均しく、吾々が知覺する限り、吾々の知覺そのものは事物のやうに思はれて知覺作用をば意識しない。科學が訂正したところの太陽が動くと云ふ第一見解も甚だ自然的ではあるが、今吾々が證明せねばならぬ第二見解も亦甚だ切實にして自然的であるらしい。

此れに就いては多くの準備を要しない。日常の看察が知覺と對象とが同一だと云ふ考の誤つて居ることを證明する。對象の知覺の中に對象が實體的に含まれて居り、對象と知覺とは同一であるやうに見えるが、對象に對する吾々の位地を變じ距離を變ずるときは知覺が變化し、前の知覺と多少違つた新しい知覺が生ずる。併し此の場合に對象が變化したとも對象が多くの對象から成立つてゐるとも云はない、唯だ知覺が變化し增加したのである。――若しも知覺と對象とが實際同一であるならば之れを如何に解釋すべきであらうか。始めの知覺をあとからの知覺によつて訂正し完成し、結局對象は色々の知覺と同一でなく、又對象から得る否正しく云へば對象に關係する知覺の總體とも同一でないと斷言する。對象はそれより

與へられる可能なる各知覺の共通原因卽ち根柢である。又は主觀から觀察すれば對象は知覺が直觀上の當然の結果を生ずる規矩である。予は此のことが特に明になる一例を採らう。吾々は太陽の眞の形とか、眞の大さとかいふことを言ふが、その眞の形も大さも決して吾々の知覺に這入つて來ない、決して見ることはできない、恐らく永久に見ることは出來ないだらうが、併し表象過程、計算、推斷によつてそれを知ることが出來る。從つてそれはいつまでも表象であると云ふことを識つてゐる。併しこれを稱して太陽の眞の形、大さと云ふ所以は、之れによりて始めて太陽に關する一切の經驗、卽ち直接の經驗やそれから導いた科學的經驗が符合するからである。此のことは同樣に直觀のどんな對象にも當嵌まる。例へば吾々の前にある皿、――其れによつて實際吾々の直觀に與へられるものは吾々の立脚地によつて異るところの投影畫的圖象の系列であり、その皿の色や形の精確な性質はその皿の位置や、これを照らす關係に依つて變化するが、その皿の圖象はその皿の形の表象に應用せられた意識的概化作用、概念作用によつて構成せられる。各人はその感覺的現象に於て特有の種々の視覺嗅覺を有する。肖像畫家は一種の抽象によつて此等の漠然たる雜多から最も印象の深い表現形式を作る。此の表現形式は表現形式として、全知覺圖象中の規則的なものを包含して居り、個々の知覺の中には與へられないものである。而してその表現形式は其の單純な知覺と懸け離れても、益々完全に對象の圖象となるにつれて、益々眞實であるやうに思はれる。要點を擇んでこれに重きを措くと云ふ美術家の遣方は、知覺の複合體に對して自然に行ふところの普通一般の表象作用の發展したものである。吾々は絕えず知覺の融合、統括によつて對象の表象を發展する。此の表象そのものは最早純粹直觀的性質のものではない。此れはヘルムホルツが云ふやうに正しく概念である。何となれば此の表象は客觀が吾

々の中に生ずる凡ゆる可能的な個々の知覺を包括するからである。對象は始めは感覺的意識として現はれて居るが、次第に對象の表象を發展することによつて、對象は益々感覺的意識から懸け離れるのである、即ち對象は知覺から表象となり概念となるのである。概念は繼起する知覺を結合し、之れを統一的に聯結する規準の役目をなすものである。併し此のことは對象そのものが單に概念であると云ふことゝは違う。概念は吾々の意識に對して對象の位置を代表するものである。

吾々は他の方面から看察せんが爲に再び知覺に戻る。――知覺が結合して全體として感覺的意識に對して對象を形るときは、その全知覺の要素は此の意識に對して一は對象の要素のやうに、他は對象の性質のやうに見える。例へば植物の葉と花とはその植物の部分であつて花紅、葉綠はその性質に屬する。斯くして客觀の性質の間に差別を發見する、一は直接且つ永久に客觀に視付し、他は客觀の性質と云ふよりも寧ろ作用と考へられるべきものである。薔薇の紅色はその香氣よりも薔薇に直接、特有であるやうに思はれる。故に吾々はアクチブに薔薇は香しいとか、薔薇は香氣馥郁たりとか言ふが、薔薇は紅なりと云ふやうに、薔薇は香氣なりとは言はぬ。深く觀察するときは勿論此の差別は消滅する。即ち薔薇の香氣が一定の香氣を發すべき機能から成るやうに、その紅色も亦一定の光線を反射すべき機能から成立して居る。斯の如く薔薇の香氣は發生するのであつて、それ自身存立するのでないやうに、又その紅色も一定の條件の下に始めて發生するのである。かやうに客觀の一切の性質は作用であつて、作用の受身は感覺體の感覺機關である。知覺の結果、客觀の性質と呼ぶものは客觀によつて刺戟せられた感官の感覺である。單純な知覺は斯かる「性質」の要素の性質については少しも吾々に教へない。而して吾々は此の要素を發見した後と雖引續いて知覺を事物そのものの性質と

述べる。此れは感覺と外界事物の性質とを實際分離することは不可能であるが故に、吾々は多數の感官を有するに非ずんば、兩者を區別することは到底出來ないからである。故に餘義なく同一客觀を多くの方面で觀察し、一感官の報告を他の感官の報告で檢査するより外仕方がない。即ち同一の對象を見ずして觸れることも出來るし、又同時に觸れずして見ることも出來る。眼をその對象から他に轉ずるときは、そのものの視覺的特性は消滅する、即ち色と可視的形狀とは無くなる。手を引き込めると、その表面の特性は感覺及び歷からなくなる。斯くの如く知覺に就いて實驗するときは、客觀の特性は感官の感じ方に依憑することが判り、又その特性の紛錯するのは主として感官の作用によることを發見する。客觀の側に於ける何等變化なくとも、感覺は變ずることが出來る。

事物と事物の感覺、知覺との中間に感覺體の感覺機關や中樞機關が挿入すると云ふ單純な事實から考へても、感覺は事物の作用に過ぎないことが判る。此の卑近な觀察は知覺の要素の現實性を朴素的に信ずる朴素的實在論を破するに足りる。朴素的實在論は常識の立脚地に立つてゐる。――勿論此の立脚地から離れることは常に誤であつて、自分の前の事物即ち空間を充たし空間の中に運動する目前の事物は眞の事物、事物そのものでなければならぬ。併しその事物と吾々との間には吾々がそれを知覺する迄に甚だ錯綜せる過程が働いてゐる。此れは心理學の記述する處である。第一は一定の形式の運動即客觀より發する音波光波等であり、――此等を刺戟と稱する、――第二はそれによつて生じた末梢感覺機關に於ける變化、例へば網膜上の視神經の擴張のやうなものである。此等の變化は二三の感官では確に化學的性質であり一般には表面化學的性質であるが、それが知覺神經に依て皮質下神經節に於ける原始的知覺中樞に傳へられ、そこから大腦皮質の末緣に傳

へられ、その刺戟によつて始めて意識的感覺と知覺とが結合する。一般に或る作用の性質は作用する要素の性質のみに依存しないで、常に同時に作用を受ける客體の性質によつて規定せられる。ヘルムホルツが云ふ如く感覺印象と知覺とは客觀の圖象でなくして其符號である。又スピノザが云ふ如く吾々が外界物體から作る表象は外界物體そのものの性質の外に吾々の身體の構造をも表はすものである。

併し吾々は尙こゝに止まることは出來ない。知覺には多くの要素があるが、感覺外のものを表象することは出來ない。故に感覺の存在と感覺せられることとは全く一致するやうに見える。例へば音響は甚しく主觀的であつて、吾々がそれを知覺する性質中に成立し、客觀世界に存在するとは考へられない。即ち音響は明かに一の過程であつて、その過程は聽覺に於て始めて現實となるのである。（音波即ち音響の物理的制約は他の階級の事物に屬し、音響感覺とは比較することが出來ないものである、全然種類が違つてゐるのである）。又これと同一のことが色（その外延を抽象するときは）、溫、寒、味、嗅等殊に主觀の感情に作用して殆ど客觀の認識を與へないものに就いて云ふことが出來る。加之このことは一言の但書を以て一切の特殊感覺（觸覺をも含んだる）に就いて言へる。即ちこれ等の特殊感覺はその性質上感覺內存在、感覺外存在と云ふ二重存在を排拒するものである。これに反して以下の知覺の要素に就いては同一のことは言へない。即ち物體の形狀は夢みることも出來るし、又其の圖象を空想中に作ることも出來る、又外界の現實界の中に置くことも出來る。吾々は之れを表象することも出來るし、又同時に吾々の表象外に存在するものと考へることも出來る。而して同樣のことは客觀の空間的性質の知覺に就いて言へると均しく、又その時間的關係、運動、量、數に就いても言へる。即ち此等の知覺の性質は同時に對象そのものの性質と考へられる、

又吾々はさう考へることに慣れてゐる。勿論これ等は最早純粋なる知覺ではない、事物間の關係、及びその部分の連結の形式の直觀である。吾々は此の直觀に於て知覺と對象とが全然一致すると考へる、換言すれば知覺内存在、知覺外存在の二重の存在を此の直觀に歸與するのである。

知覺の成素間の此の差別に基いて、既にデモクリトスは認識の二種類の對立を創說した。卽ち一は正しい認識で、物體の眞性を捕へたもの、他は不正なる認識又は外見的認識で、物體の感覺的性質を人間的の考と解釋とによりて客觀そのものの性質と認むるものである。此のデモクリトス流の見解はガリレオが之れを一新して以來、今日迄、自然科學を支配する思想である。卽ち自然科學も亦感覺的認識の批判によつてその對象を捉へる。卽ち自然科學は客觀世界を以て運動する物質の系統と觀た、卽ちその世界觀の建設に唯知覺の形式的成素を利用した。—而して感覺を感覺神經の特殊エネルギーとなし、そのエネルギーの起源を特に人間と動物との感覺機關の中に置いた。

ガリレオが言ふ如く、目、耳、鼻を取り去るときは同時に色、音、香がなくなる。それと均しく寒溫の感覺は單に溫覺の中に存在するのみである。又物體の固さ軟さも觸覺をとり去るときは消失し、後に殘るものは唯空間充實、數及び物體の運動、靜止のみである。此の「第一偶性」は吾々が物質を表象する每に考へねばならぬものであり、ガリレオが考へた通り今日多くの生理學者は考へて居る。ヨハネス・ミューラーの特殊エネルギー說は生理的科學に一次的性質と二次的性質との間の差別を導いたものであるが、今日では一個の信條として通用して居る。ヘルムホルツは此の說を明晰なる形で言ひ表はして一層發展したが、併し既に此の說が變化すべき方向を示した。渠は異種感官の感覺の差別の一層深い意義を示し

た、例へば色と味との差は感覺の態様の差であるとした。併し同一感官の感覺の差に就いては、それほど深く理解することが出來なかつた、例へば赤と青との差を性質の差であるとした。而して渠は主張して曰く、態様は全然感覺神經によりて規定せられる、卽ち聽覺は聽神經によりて、視覺は視神經によりて規定せられる。之に反して性質例へば一定の高さの音、一定の階級の色は外界刺戟によつて伴隨的に規定せられる、(此の性質說は音感覺に關する渠の古典的研究から得たのである)、例へば刺戟を知覺する耳の機關卽ち原膜は別々に異りたる高さの音響、卽ち種々の振動數を有する單音波の上に調子を合はせること恰も翼琴の絃の如くであり、音調の特殊の性質に對して耳の方で特殊の刺戟が之れに對應すると。併し感覺機關全體も亦正常適當なる刺戟に適應し、その刺戟を受容するやうに向けられてゐないだらうか。從つて感覺の性質が規則として刺戟の種類に關聯し依憑すると云ふことは又感覺の態様に就いても適用することは出來ないだらうか、例へば耳は音波に對してのみ、眼は光波に對してのみ開いてゐて、他の刺戟には閉ぢて居るのではあるまいか。感覺の結果から云へば刺戟の性質には關係せぬと云ふヨハネス・ミュラーの說を固持する爲に、ヘルムホルツが感覺の態様に關し且態様のみに關し斷定した結論は重大な意義を有つてゐたが、渠は不正常不適當な刺戟に誤つて應用した。例へば視神經も光線の外電流、機械的衝動、打擊によつて刺戟することが出來る、而して各刺戟は光、色と云ふ視神經特有の態様によつて應ぜられると渠は云つたが、併し此の證明は充分有力なものとは考へられない。何となれば斯くては明に正常適當なる刺戟が除外例、卽不正常なる刺戟によつて覆へされねばならぬ、然るに除外例は寧ろその特別なる境遇から說明せられると云ふことが說明法の公率であるからである。一機關がその普通ならざる刺戟に普通に

して且つ全然發生論的に決定した方法で反應すると云ふことは驚くべきことだらうか、例へば眼が打擊を受けたとき光と色とを發することが驚くべきことだらうか。併し不正當に刺衝せられた感覺は意識にとつても亦正常に刺衝せられた感覺とは違つて居る、卽ち刺衝せられたことを明かに感じ、尙客觀的光線の影響を受けたときの眼の共働作用の帮にして愉快なる活動と、其の壓迫映像の急激にして慣れざる出現とを比較する。眼に對する打擊が痛いのみならず、それから生じた幻像も亦痛い。同樣のことは電氣で起された音に就いても言ふことが出來る。その音は正しく聽官の內部に置換せられるが、併し正當に起された音と間違へることはない。その音色は甚だ高くして、金屬弦を彈じて生じた音に類似し、不愉快なる點に於て違つて居る。斯くて結局一般に唯正當なる感應のみしか感官にはないと云へる。視神經の電流による刺戟は電波と光波とが同一種類のものであることが判つた今日、不適當なる刺戟であるとは云へまい。又眼の上を敲くときは視感官物體を刺戟して化學的分解を起し、玆に視覺に對する適當なる刺戟となるのである。卽ち感官は特殊的に規定せられた刺戟に順應する結果、刺戟過程と云ふ常に結合せる多くの原因の中から、其感官に適應する刺戟を含む部分を選ぶことが出來る。最後に根本的の考を指摘せねばならぬ。それは感覺の態樣は專ら感覺神經から生ずると云ふ說、卽特殊エネルギー說に反對する說である。卽ち感覺機關そのものも外界世界の一部分であつて、外界世界が唯質量と運動とから成立してゐるとすれば、感覺機關も亦單に運動の維持者傳達者たるに止まり、その外に特殊の作用を生じない筈である。蓋し無からそれを生ずる譯にゆかぬからである。精神卽ち意識も感覺を創らない、只感覺を與へられたるものとして意識するのみである。視覺其のものは靑でもない、赤でもないが、聞むる對象は色々の色に現

はれる。聽覺は高聲でもなく無聲でもないが、聽覺は高聲をも無聲をも感ずる。故に吾々は自然科學が分量的研究を始むる假定を完成せねばならぬ。換言すれば機械論に於て世界の完全なる像を認めんことを期待せず、唯世界の像を見るものと考へねばならぬ。事物は量的作用の外に質的作用を生ずるに違ひない、即ち特殊の感覺が確に存在してゐる。而して感覺は刺戟の特性の發展し盡くしたものとして表はれると共に、感官の特性によりて伴隨的に規定せられるのであつて、感官のみによりて作られるのではない。併し以上の觀察は總て唯問題の解決を求めんとする方向を指示するもので、吾々の今迄らんとする論程外のものであるが故に、吾々は再び吾々の問題に立ち戻り、感覺的認識の批判を進めたい。

一切の形狀は空間に於て可能であり、運動は空間と時間とに於て可能である。從つて形狀と運動との現實性の樣式は、一般に空間と時間との現實性の樣式に依存する。從つて前者が現實なりとすれば、後者は一層確に現實であらねばならぬ。吾々が空間と時間とに必然的に歸屬せねばならぬ所の無限性は決して經驗することは出來ない、從つて時空其のものを絕對的所與のもの即ち自存的のものと考ふることは出來ないとすれば、又カントの時空即直觀形式說（時間空間はその中に知覺せられ又知覺し得べき事物と異りて、事物が其の中に知覺せられる一般形式である）即時間空間は感覺體、例へば人間の直觀作用の法則であると言ふ說が正しいとすれば如何であらう。若し此の考が正當であるとすれば、世界は吾々に對して忽然として全然異つた意義を得て來る。即ち感覺世界は感官の感じ方（感官の特性の全發展たる）の外に、又直觀の法則（感官の存在の形式を吾々に對して規定する）に依存することを示す。此れは感覺世界を以て感覺者、直觀者に對する現象の總括なりとする學說である、即ち世界を以て吾々の直觀と經驗に制約せられ

で存在するものなりとする大學說である。既に述べた如く、此の學說を正しいものと假定すれば、此の學說は確に科學的世界觀の精髓をなすものであらねばならぬ。

以上吾々は認識に對する批評的考察の意味を明らかにせんが爲に、比較的簡單な觀察から出發したから、此れから一層深奧な問題に向ひたい。抑も思惟と云ふ事實が存在する。即ち知覺に依つて認められるよりも一層廣汎な相關關係を知覺の對象の間に認める。即ち第一に、事物の中に必ず常に恆常的なるものがあることを假定する。此れを哲學の言葉で云へば、事物の特性と偶性とは實體の統一中に相關關係すると云ふ。第二に、事物の變化は必然的關係を有することを假定する。即ち事物は因果律によつて相關關係を保つてゐると言ふ。實證科學に於ては第一の假定は餘り用ひられない。實證科學は實體と云ふことを用ひないで、其の代りに物質と云ふことを云ふからである。故に第二の假定も云ひ換へられて、因果律は物質の中に一般的であると言ふ。因果律即ち變化の充足理由律は科學の假定である、詳言すれば自然現象の研究が研究たるが爲に假定する否假定せねばならぬ要求である。前に述べた二個の假定は唯應用の方面に於て異るのみで、本質は同一である。思惟は此の二個の假定を以て、知覺に與へられる事實以上に出るのである。所謂實體は見ることは出來ない、又物質即ち物理學者の所謂實物も觀ることは出來ない、即ち思惟せられるものである。觀察し得るものは均しい現象即ち空間充實の反覆である、換言すれば均しい大いさ即ち量の反覆であつて、同一事物、同一量の不滅ではない。又實體や物質が見られないと均しく、因果律も感性的に知覺することは出來ない。原因其のものは先行する過程にも、後行する過程にも、又後行其のものの內に於ても感官に與へられない。而も此の兩假定は

科學的認識の根本概念たるのみならず、日常の經驗も此れを基礎として居る。

吾々はあるものを知覺の對象と解する度毎に、その對象が知覺によつて始めて成立するとは信じない、換言すれば知覺が更新するにつれて、甲對象が消滅して乙對象が新たに作られるとは信じない、否差控へてさう言はうと思ふ。吾々は對象と知覺が不離の關係を有すとは信じない。對象は外的原因によつて變ぜらるゝに非れば知覺が消滅した後にも依然として存續することを信ずる。此のことは其の對象が他人の感官にいつまでも現存して居り、其の人に尋ねて其の對象が存續することを確信すると云ふ理由によつて信ずるのではない。北極地方の事物は未だ嘗て人間の眼で見たものはないが、然し何人も其の存在を疑はぬ。客觀は必ずしも知覺せられなくとも存在してゐると云ふ信仰、及び事物の知覺は交替しても其の事物其のものは不變恆常であると云ふ信仰は、吾々が實體と云ふ概念で言ひ表はす信仰である。此の信仰がなくば經驗はない、何となれば此の信仰がなくば、云々すべき客觀はなくなるであらう、知覺判斷に對する客觀はなくなるであらう。而して經驗なくば又科學なきが故に、一定の客觀に對する各人の判斷の一致は全く不可能となる。化學者が一定量の水を一定の重量の水素と酸素とに分析し、又此の兩素を再び結合して同一量の水を作るとき、其の要素は始め結合せられた狀態にあつて後には分離した狀態にあつても同一の要素であると云ふことを少しも疑はない。若し化學者が其確信を單に觀察によつて支へやうとするならば根據を失ふであらう、蓋し彼の知覺は時間的に分離して居り、從つて異つてゐるからである。均しいのは唯知覺である、詳しく言へば均しい知覺と一致する客觀を見るのである。併し均しい客觀は決して同一の客觀ではない。然るに化學者は依然として其の同一元素の存續を確信する。而して化學者は此の信仰を固執しなければなら

ぬ。何となれは此の信仰によつて始めて觀察と對象とが結合せられ、又觀察相互が結合せられるからである。純粹「現象學的」物理學即ち化學の性質如何は別として、兎に角化學は其の事實の「記載」に對して少くとも普遍妥當性を要求せねばならぬ。換言すれば其の記載は他の研究者にも通用せねばならぬ。

斯くの如くにして吾々は思惟を欠如することは出來ない、否日常の經驗にも思惟を欠ぐことは出來ない。思惟は知覺を完成するものである。常に吾々は事實中に與へられるよりも一層大なる相關々係を假定する。既に此の事からして純粹經驗（知覺に於ける事實の總括を純粹經驗と稱する）は科學の根據を作るものでない、即ち客觀の認識となることは出來ないと云ふことが判る。茲に於て經驗の批判の必要が生ずる、換言すれば經驗と科學が成立する假定の吟味と證明とが必要となる。

抽象的ならぬ方法で此必要を比喩に依つて明かにすることが出來る。物理學者が計量し實驗する道具の精確なる知識とは何ぞやと言へば即ち研究一般に對する認識の批判と云ふことである。一切の經驗の道具は人間精神そのものである、從つて人間精神を知らないものは人間精神の所產即ち經驗を知らぬものである、詳しく云へばその經驗に知覺が何を寄與するか又知覺の代りに悟性が何を與へるべきかを知らないものである。悟性はデカルトが云ふ如く道具中の道具である。悟性の本性を明かにして科學にその研究の標準を與へることが批評哲學の問題である。事物の確實性は決して認識の確實性より大なることは出來ない。

批評哲學は啓蒙期の產物である。批評哲學は其の時代の傾向を明瞭にし、且つ確定せる概念に導きつゝ、自らその時代の主要なる精神力となつた。ボルテアー

は啓蒙期を稱して「理性時代、哲學時代」と謂つた。啓蒙期は「自ら求めたる幼稚から人間の出て行く」時代であり、因習の壓迫、迷信の束縛から人間思惟の解放せられる時代である。「思惟を解放せよ」とはカントの格言である。吾々自らによつて吟味せられた認識が生き〳〵した認識である。かかる認識が始めて吾々の全本性と一體となることが出來る。精神的財産は之を取得せんが爲には自ら儲けねばならぬ。今日吾々は啓蒙思潮以上に卓越したことを考へるやうに慣れてゐる、又啓蒙思潮が歴史的觀念を缺いでゐることを知つてゐる。勿論啓蒙期も歴史を解してゐた、否歴史を大なる型で記述することを始めた、併し歴史から抽象して理性を以て歴史に代へやうとした、歴史を「新しく始めやう」とした。併し國家、社會に於ける歴史的要素を輕視して個人の理性をあまり高く評價しやうとすることは、根柢に於て啓蒙其のものの原理と矛盾してゐる。蓋し批評と啓蒙とは歴史は自由精神を以て看察せられることを假定する唯理論の概念の中よりも寧ろ歴史的出來事の過程の中に存在して居る。各文明期と均しく啓蒙期は人類教育の一轉機である、從つて又個人教育の一轉機である。各人はその生涯に於て一度は啓蒙期を經過せねばならぬ、一度は破壞的見解を設定せねばならぬ。然らずんば眞に理性體となることは出來ないで、教育や人間を左右する他の權力者の意見の自働機たるに過ぎない。勿論啓蒙思潮は安住すべき立脚地ではない、唯通路である。啓蒙思潮の本分は人間を自律、獨立、不羈に導くことである。此の點に啓蒙思潮そのものの權威が存在する。

第一の批評哲學者たるロックは尤も率直に又最も明白に啓蒙思潮を自己の人格に表はしてゐる。渠の友人が言つた如く、渠は其の學問上の見解と同じく、常に理性によつて指導せられ、理性の指圖に從ふやう常に好んでゐた、又從ふことが出來

た。第一に宗教上の見解、次ぎに科學上の見解の自由討究の權利を自ら要求した如く、世人にも此れを認めた。渠は自ら自由思想家なるが故に、他人に對しても、否渠の著書の讀者に對しても、自由に思索せんことを希望し、要求した。自己の理性で單獨に決定せねばならぬ事柄に就いて、他人の考に賴ることは、他人の悟性を以て思惟せんと欲すると均しく、其の愚なること、他人の眼を以て見ることが出來ると思ふと一般である。ソクラテス流の風格がロックの全哲學全人格を通じて流行してゐる、曰く「吾人の問題は一切事物を識ることではなくして、吾人の行動に關係してゐる事物を識ることである、人間生活の目的を達する爲め事物の自然的な經驗し得べき活き方と吾人の義務とを識れば足りる、前者は吾人對事物の關係に於て、後者は吾人の各動作の爲めに」と。吾々は悟性をその特性とせる此の明晰なる思想家が既に啓蒙觀念を道破し悉くしたことを怪まない。渠の人間悟性論の外各種の論文、殊に他宗認容論、基督教義合理論、政治論、教育論は啓蒙哲學の全プログラムを提供するものである。これ等の論文はヴォルテアを先頭とする十八世紀佛國大著述家に依つて通貨のやうに世界に擴まつた主要なる思想を一切包括してゐる。ヴォルテアはニュートンの自然科學と共にロックの哲學を佛國に齎し、ルツソーは其の「エミール」中にロックの教育思想を移殖した。

啓蒙思想の中心觀念を始めて發見して啓蒙期の發展に有力なる役割をつとめたロックが自然の途行きとして同時に批判哲學の開祖であるといふことは確に注意に値する。尤も自分は批評哲學とは稱しないで謙讓なる「人間悟性論」の名で導いて來た。又此の批評哲學を勃興させた直接の因緣も均しく特色あるものである。即ちロックは時に二三の友人を集め好んで學問上の事に就いて談論した。此の討論は特に努力し、又その仲間は尤も教養あり、博學の人士であつて、其の名は一部

歴史に殘つたほどの人々であるが、議論は遂に結果がなかつた。其の仲間の言によれば議論の題目となつたものは天啓宗教と道德とであつた、而して少くとも前者は形而上學的のものだと云ふことが出來る。問題は益困難となり、疑惑は愈深くなるばかりで容易に解決すべくも見えなかつたとき、忽然としてロックが思ひ浮んだことがあつた、即ち此れは誤れる途を辿つてゐるのである、摑むべからざる目的を摑んでゐるのである、此の種の問題を提起するに先だち、悟性は斯かる遠隔の事柄を討究することが出來るか否かを知る爲に、人間悟性の資格を檢査せねばならぬと。是に於て認識能力即ち眞理と眞實とを識る能力としての悟性の研究が、一切の哲學的研究の眞先に措かれ、科學の認識價値に關する問題が提起せられた、而かも其の問題の主たる意義に觸れてゐた。

ロックは此の問題即ち理論的哲學そのものの問題の新しきこと、及びその必要なることを明に意識して居つた。人間悟性論の序論に述べて曰く「悟性の能力が正當に評價せられるならば、認識の範圍が發見せられ、事物の明白なる部分と不明なる部分とを分つ分界線も決定せられる、從つて人間は其の判りきつた識るべからざることに就いては焦慮することを止めて、他の部分に向つて研究を進めて、それだけ一層善い結果を擧げるであらう」と。又ロックに從へば批評哲學は一切を知ることが出來ると云ふ想像と、その想像は竟に迷妄であると云ふことを悟りて陷る懷疑との中正を得てゐるものである、――カントの言を藉れば獨斷論と懷疑論との間の中正を得てゐるものである。批評哲學は知識と臆見とを明晰に分界して、吾人の認識能力を超越する事柄に關する永久の爭論を終局せしむるものである。ロックの悟性批判の目的はカントの理性批判の目的と全然同一である。

認識の確實と範圍とを決定するはロックの研究の目的である。之れを決定する

途はやがて認識の起源と發展とを研究する端緒を拓くものであるとロックは考へた。茲に渠は生得的概念と生得的原理との假定に逢着した。而して此の假定を哲學に發展した各形式に於いて論難攻擊したが、それは單純なる動機、特に純粹科學的動機から出たのではない。生得的觀念が存在すると云ふ信仰は人間の思惟を制限し抑制する、蓋し生得的觀念は不變的觀念であり、人間精神を拘束し之れを奴隷にするからである。「一切の原理に對して些の疑義をも挿むべからずと云ふことを最上の原理とすることは自ら大家と稱するものにとつて些の利益もない」。表象は單に其の起源が知れない爲に、換言すれば單にそれが吾々に植ゑ付けられた時を想起することが出來ないが爲に生得的であるやうに見える。「子供の表象や見解程通俗なものはない、宗教上の事柄に就いて殊に左樣である。此れ等は皆父母や乳母や教師がその精神に印象したのである。故に此れ等の所謂生得的表象の源は多くは乳母の迷信や教師の駄辯である」。ロックはあらゆる表象や原理の生得說を否定した。蓋し渠は一切のことに就いて證明を求めたので、この場合にも亦自由思惟の精神に支配せられてゐたからである。多分世人はこの生得說の放棄を以て根本的のことと思ふであらう。併し生得的のものは歷史的のものではないか、詳しく云へば遺傳によつて傳つたものではないか。――ロックがこの生得說を放棄したのも亦歷史的のものを蔑視する啓蒙思潮の一端ではないか。表象の生得的たることを否定したからと云つて、又それが正當であるからと云つて、精神が生得的であることを否定するのはロックの考ではない。精神能力は生得觀念に對して發展し、此れを超越する。精神能力は敎養によつて變化することも出來るし、又經驗によりて變化する。ロックの意味に於ても精神能力は生得的たることが出來る、而かも其の獨立性を妨げない、否獨立的であると云ふことがロックが特に明か

に說いたところである。渠は精神の生得的能力と生得的作用とを特に論じたが、此れは識別の能力であつて知覺の能力ではない、抽象の能力であつて概念の能力ではない。蓋し理論的原理、實踐的原理は勿論生得的である。ロックによるも精神は或る意味に於ては生得的である。ライブニッツとロックとの反對を表はさんとして「悟性そのもの」を引出すのは誤である。ライブニッツ自らもこのことをよく知つて居つた。「悟性そのものを除いては悟性の中には感覺の中に前以て無かつたものは一も存在することはない」と云ふ命題は、精神の働きたる知覺中に觀念の兩生源の一を發見したロックの意見に於ても左樣である。ロックの批難以後生得的表象の說は哲學から驅逐せられた。實にロックの批難は甚だしく根本的、決定的であつて、何人も復再び生得的表象說を唱へるものはない。カントの範疇即ち純粹悟性概念も亦決して生得的概念ではない。此れを生得的概念であるとするものはカントを解しないものである。カントはロックが純粹悟性概念を生得的となさずして、却つてその起源を研究した點を多としてゐる。ロックの時代は生得觀念に關する論爭が哲學の死活を制するが如く見えた。反對論者はこの點に關して人間悟性論を批難した、否之れを讀まない前にこの點の爲めに此の書を拋つた、曰く精神にして生得的概念を有しないならば、その概念は全然空虛にして本質なきものであり、精神自身も無に歸して仕舞ふだらうと。併し今日吾人の見解は此れと反對である。生得說の誤れる說は今日消滅した。この說が認識の確實性に關する問題に對して何等價値のないことは明である。吾々は斯くの如き說に安住することは出來ない。ロック自身にとつての如く、又吾々にとつて、渠の研究の重要なる點は、人間悟性論の第一篇即生得的觀念や生得的原理を攻擊した篇にあらずして、觀念の起源を論じた第二篇と、認識の概念を研究してその限界を決定した第

四篇である。

常に意識の對象即ち其內容たり、又たり得るもの、即ち精神が知覺し思考するとき精神が占有せられるものを稱してロックは觀念と謂つた。觀念と云ふ語は抽象的思惟を意味すると共に、又單純なる官能的印象即感覺を意味するが故に、ロックの觀念起源論を正當に理解する爲には此のことを常に念頭に置いて置かねばならぬ。單に單純觀念即集合觀念の要素に就いて云へば、渠の二重經驗起源說即感覺と內省即ち內外兩感官から觀念が生ずると云ふ說は成立する。經驗說の原理即ちロックが所謂認識は經驗に基き、そこから最後の根柢に導かれると云ふ說は單に思惟の內容即ち材料に關するのである。ロックの說いたところは一切の集合觀念は官能的印象即ち單純觀念に對する精神の働きによつて起り、又は此れによりて發見せられると云ふことである。感官が單純觀念の生源である如く、精神の働き方が集合觀念の生源である。此の生源から外延、連續、統一と云ふ單純觀念の變化から無限に多くの數學的觀念や概念が發生する、又それから關係表象や一切の抽象的一般觀念が生じ、遂に實體と云ふ一般概念が發生する。故にロックが認識の起源に關して實際說いたところは單に次のことに過ぎない、即ち內外知覺は一切の觀念に材料を與へ、又精神そのものが構成したものに材料を與へ、或は觀念の發展を喚起すると云ふことである。ロックの悟性批判の重要なる業績を其の本來の意味に於て理解する爲には、吾人は以上の說を前提として許さなければならぬ。以上の說は實に形而上學的哲學の至要概念、即ち予が先きに謂つた實體と云ふ概念に關するロックの批判である。

事物の「實體」如何と云ふ問題は十七世紀の哲學系統の根本問題であつた。當時の哲學體系の思辨的部分は全然此の問題に關して發展し、捉へられてゐた。此の

形而上學的の姿に於ける問題をロックは科學から驅逐した、即ち實體概念を批判的に打破した、否渠が打破したによりて始めて實體の眞意義と及び此れと結合した問題が現れてきたと云つてよい。吾々はロックの批判以來最早實體を認識の內容的概念中に數へない。ロックは實體に關する內容的見解を廢棄してその形式的見解を始めた。

通俗の見解に從へば形體的事物と精神的事物とを區別して二種類の實體とし、いづれも經驗することが出來るものと信じてゐる。ロックは此の見解に對して實體の一般性も又物體、精神と云ふ實體の特性も認識することが出來ないと云ふことを明かにした。一般に實體と云へば形體的事物と精神的事物に共通なる概念である。この概念は內容のない概念であつて、即ち一個の觀念である、而してロックに從へば外的知覺からも又內的知覺からも發生しない唯一の觀念であり、他の觀念と均しく知覺と云ふ方面からは人間の精神に到達することが出來ないものである。從つて實體は經驗によつて與へられたるものを理解する仕方の中に其の起源を有せねばならぬ。ロックの見解も亦左樣である。何となれば渠は實體を感覺印象に對する通俗的評價から導いた、曰く「吾人は如何にしてこの單純なる觀念が成立し得るかを知らない、吾人は通常單純觀念がその中に、又は其れに依つて成立するあるものを單純觀念の根柢とし、之れを呼んでその實體と云ふ」と。故に實體は「如何なるものであるかと云ふことが判らないあるものゝ不確定なる假定に外ならぬ」、即ち吾々がその本性を言ひ表はす特殊な一定の積極的表象を有しないで、その働きに就いて不明瞭なる表象を有するものゝ假定である、換言すれば感覺的現象の支持者である。仍て感覺的現象は此の支持者の性質即ち偶性となるのである。ロックはこのことを一個の戲談に過ぎない比喩を以つて說明

した。即ち彼の憐れな印度の哲學者が地球は象によりて支へられ、象は龜によつて支へられてゐると說いたが、然らば龜は何によつて支へられるかと進んで尋ねられたとき、狼狽してそれは自分の知らないあるものに依つて支へられてゐると答へる外はなかつた。歐洲の形而上學者はこの時少しも狼狽せず、一言にして答へたであらう、曰く實體と。「蓋し判らぬときは丁度うまい具合に言葉で誤魔化しておくものである」（ファウストの句）。而して特にその言葉がよく世間に知られ、珍重がられるときは、直に正貨而かも純金の正貨として通用する。實體と云ふ一般概念は全く此の種の言葉であつて、物體の上にも精神の上にも應用せられる。從つて物體の實體と云ふ表象は精神の實體と云ふ表象に比して少しもより明瞭でない、兩者の明瞭さは同一である、換言すれば均しく不明瞭であつて共に理解することが出來ない。

實體の一般性質が判らないと同じく、實體の特殊性質も亦認識することは出來ない。事物の中で經驗に與へられるものは、部分と特性の共存であり、之れに加ふるに部分を統一體に連結する結帶である。水を實體と稱するのは常に可感的性質の同一種類を目擊し、又は試驗によりて發見するからである。詳しく云へば一定の重量を有し、一定の溫度內に於いて液體を保ち、無色透明、百度に分目せられる寒暖計四度に於て最大の比重を有し、零度に於て固體に變ずると云ふが如き特性を有する同一種類を發見するからである。此の性質は皆相伴的に現はれるものであつて、その結果或る性質から他の性質が續出する。故に此の種類を同一名稱を以つて水と呼ぶことが出來る。然れども有形的實體の色々の性質の結合の本性を、經驗し得べき相關々係以上に深く探究しやうとすることは無益である。又精神作用の相關々係も亦內的知覺に現はれる範圍內に於てのみ知ることが出來るのであ

つて、精神の本質及精神が如何に思惟するや、如何に欲するやは全く不可知的である。故に實體に就いて吾々が有する表象は事實より獲る單純なる觀念の一定の連結の表象に過ぎない。而して此の觀念は相伴的に共存するが故に對象の統一を構成し、而かも此の共存は知覺せられる丈けが知れるのである。實體は事物の本質の表象ではなくして、事物の恒常性、即ち特性の共存、尙適切に云へば關係の恒常性の表象である。物體の部分の凝集すら精密に知ることは出來ない。實に吾々はロックが當時の科學の例に倣ひて假定したると均しく、物體の一般性質即ち位置、形狀、運動を適宜に認めねばならぬ、詳しく云へば此等の性質が物體自體に存するが儘に認めねばならぬ。然れども之れに依つて物體自體に於ける此等諸性質の相關々係を知ることは出來ない。物體は總て一定の空間を占めて居り、此れを分割すれば個々の單位に分つことが出來る、即ち物理學的に云へば分子に、化學的に云へば原子に分割することが出來る。併し如何にして各部分は相結合せられるか、各部分を相互に襯附する漆喰は何であるかとロックは問ふ。吾々はとり圍んでゐる分子の壓力であると答へる。然らば此の分子の各部分を壓迫するものは何んぞやと云ふ新しい疑問が起きる。答へて曰くそれは第二の分子であると。斯く次ぎから次ぎへ追うて行つて遂に無限に至る。斯くの如く分子を假定して各部分の凝集を說明したと思つてゐる。併し無限の中に逃れることは掴むことが出來ぬもの、統一的に總括することが出來ぬもの〻中に逃れることではあるまいか。又分子の間には引力があると云ふがこれも均しく狡獪な方法である。モリエールが阿片の催眠作用を說明して、それは阿片が催眠力を有してゐるからだと云つたのと好一對である。各部分間の相關結合を說明しやうとして此相關結合を惹起する力に歸するのである。物體の部分及物體相互並にその作用の機械的性質の間の相

關々係は或る程度迄は尙知られてゐない。「物體の位置、形狀、運動が他の物體の位置、形狀、運動に變化を生ずるといふ事は必ずしも不可解のことではないらしい。この意味に於て原因結果は同種であつて、器械的に活(はたら)く原因から自然過程を說明する說明方法を以て他の說明方法よりも優れたものとする所以である。勿論充分に器械的作用の本質を理解することは出來ない。「運動は動く」、併し何によりて動くか、衝突、遠心力又はその他の原因によりて動く、然らば何故に甲狀態が消滅して乙狀態が現れるか、此の內面的原理は一言にして掩ふ事が出來る、卽運動の傳達これなりと。然れども斯くの如き說明によつては事柄の本質は少しも洞見せられてゐない。——更に器械的觸發相互の關係から、官能的印象の特殊なる性質、卽ちロックの所謂「二次的性質」に對する關係に移るならば、事物の自然的連結を益々廣く理解せんとする試みは全く無效である。「吾々の精神は物體の一次的性質と物體が吾々に生ずる感覺との間の或る理解し得べき相關關係を發見することは出來ない。物質の如何なる分子の位置、形狀、運動が如何にして吾々に色、味、音の感覺を生じ得るかといふことは如何にするも知ることは出來ない。分子の器械的作用と其の感覺との間には些の類似點も存在しない」。自然に關する認識の此の限界はデウ・ボア・レイモンが特に發見するまでもなく、ロックに於てレイモンは學ぶことが出來たのである。斯くの如く感覺と外界事物そのもの〻假定的性質との相互關係の間に、理解し得べき一致點を發見することが出來ないとしたならば、物體と精神との間の交互作用は益々理解することが出來ないものであることを思はざるを得ない。「如何にして思惟が物體を動かすかと云ふことは、如何にして精神中の物體の運動が思惟を生ずるかと云ふと均しく吾々の理解力を超越して居る」。物體及精神の觀念を如何に詳密に檢査しても決して之れを知ることは出來

ない、唯經驗が兩者の間に交互作用が存在することを示すのみであるとロックは思つた。――此の物心の交互作用の問題をスピノザの說に依つて解決することはロックの知らなかつた所であらうか、否それは寧ろ形而上學的だと思つたのである。

實體概念に對するロック流の批評の結果は此れを二個の主要命題に概括することが出來る。第一、實體そのものゝ本性は判らぬ、何となれば實體は或る不可知的存在の假定であるからである。第二、實體の諸性質の相關關係の本性は理解することが出來ぬ、何となれば經驗は單に諸性質の結合を認識せしむるのみであつて、その依存性卽必然的連結を認識せしめないからである。併し斯くの如く實體の本質は判らないにも拘はらず、此れを假定することは經驗にとつて缺ぐべからざることである。而して實體を假定するによつて生ずる問題はカントが始めて之れを解決したのである。

事物の諸性質の共存の必然性の洞觀し難きが如く、事物の作用の交互連續に關して其の連結の必然性を洞見することは出來ない。ヒュームの問題たる根本的連結の問題には既にロックが觸れてゐる。卽ロックは經驗によつて事物の習慣的經過中に其の結果の恒常性と規則性とを看取することが出來るが、後續する事物の表象からは結果の必然性を演繹することは出來ないと云つてゐる。卽ち吾々の觀察し得る限り事物は連續的に繼續するが故に、事物は一の法則に從つて作用すると云ふことを結論することは出來るらしいが、その所謂一定の法則を認めることは出來ない。

此れを要するに感官の入口を通じて精神に齎らされる單純觀念なくば集合觀念たく、又觀念の一致不一致を理解し得ざるときは認識は存在しない。從て認識の範圍は確に觀念の範圍よりも廣いと云ふことはあり得ない、否寧ろ狹からねばな

らぬ。何となれば認識は觀念の比較と結合を基礎とするからである。觀念の一致は縱令直接卽ち直覺的に認められないにしても、認識が可能なるためには間接卽論證的に認められねばならぬ。若し仲介觀念なくば證明の根據がない。然るに事物の作用卽その感覺的性質の連結には仲介觀念がない。故にロックは自然科學は決して論證科學でないと斷言した。自然科學は絕えず新なる經驗に賴り、且つ歸納と及びそれから得る實際的判斷に賴るのであつて、その確實性と證明とはその對象のみに委するのではない。形而上學はその對象が縱令存在するとしても、感官に與へられないから論證科學でないことは容易に斷言し得るが、ロックによれば單に形而上學のみならず物理學も亦嚴密なる意味に於て科學でないのである。

併しロックの人間悟性論の以上の主張は充分に證明せられない點がある。卽ち渠が人間悟性論を書いた時は現象の相關々係を純粹經驗の限界を超えて追求しやうとする唯一の方法、卽ちガリレオやニュートンの創めた現象を數學的に分析して、自然の確實なる法則を抽き出さうとする方法に就ては充分に知らなかつた。ニュートンの著書が數學によつて新しい途をロックに拓いたのは可なり後のことであり、當時ロックはニュートンの著書を理解する程數學に通じてゐなかつた。渠の「人間悟性論」はニュートンによつて自然認識の眞方法を敎へられない前に完成した。其後渠は衝動及衝動による運動以外に尙他の物理的過程の說明根據のあることを知つた。今やニュートンによつて啓發せられ、自然現象に數學を應用すれば自然認識の限界を單純なる經驗によるよりも甚だしく擴張することが出來ることを認めた。渠は人間悟性論を此點に於て改訂しやうと思つたがこの目的は達することが出來なかつた。

予は玆にニュートンの科學を充分に理解し通曉して、その上に建設せられたカ

ントの深遠なる批判論を紹介するために此のことを注意して置く。――併しロックからカントへ移る爲には先づヒュームに趣かねばならぬ。

第四講　認識の原理

此の問題の現狀より認識の原理を講ぜんとせば、何人も必ず先づヒュームとカントの學說に逢着せねばならぬ。此の二大批判的思想家の見解は今日尙ほ歷史的のものになつてゐない、卽ち過去のものに屬さないで尙今日の哲學に生存して居り、現代の科學の二個の相對立する潮流を規定してゐる。

一切の認識は經驗から發生すると云ふロックの說によれば、經驗から起つたものであると云ふことが認識の妥當性の證明とならねばならぬ。玆に於て經驗は知識の確實なる基礎にして、又眞正の證據として自明のものとせられてゐる。故にロックの意味に於て卽ち經驗論に於て經驗と云ふときは同時に眞理と云ふことである、卽ちデカルトの意味に於て生得的概念と云ふに外ならぬ。故にヒュームが

所謂經驗のみにては徹底した解決を得たものでなくして尙問題が殘つてゐると云ふことを發見したのは、ロック以上に最も要々なる點に於て一歩を進めたものであつて、非凡の犀利な眼光を有してゐた證據と云はねばならぬ。經驗を以つて單純なる感覺印象以上のものを意味するとすれば、所謂經驗は自明のもの、卽ち吾々が直に賴り得るものではない。經驗哲學の地盤に經驗とは何ぞやと云ふ問題を提起したのはヒュームの効績であつて、ヒュームが哲學史上特異の位置を占むる所以である。經驗を必要とする限り經驗は認識なりと云ふ事を證明することは正しくヒュームの問題である。卽ち經驗から來る一切の結論根柢は何ぞや、經驗そのものの原理は何ぞやと云ふことがヒュームの問題である。而して此の問題は渠より前に何人も提起した者がないことを自ら知つてゐた。

經驗とは何ぞやと云ふ問題は二個の方面から摑む事が出來る、卽ちその解釋は二個の方法に求むることが出來る。一は經驗の發展史からして此の問題に答へんとするのである、換言すれば吾々は如何にして經驗に達するかと云ふ事を研究するのである。併し此の心理的發生論的方法は明かに經驗は何ぞやと云ふ究竟の目的には達する事が出來ない、換言すれば經驗の認識論的價値はこれによつて決定せられない。經驗は何ぞやと云ふ事を判斷することは經驗の成立を說明する事とは別の事である。且つ經驗の何たるかを知らなければ經驗の成立を研究することは出來ない。吾々の記憶は如何に其始源に遡つても經驗の起源に遡る事は出來ない。從つて經驗の發展の過程は此れを假說によつて模造せねばならぬ、而して此の假定は經驗の概念以外に求めなければならぬ。

併し經驗は何ぞやと云ふ問題に對して尙第二の解釋法がある。此の方法は既にロックが指示したが、ヒュームが始めてその方法の正しい事を充分に意識して取